

---

# 君と私の恋愛模様

依櫻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君と私の恋愛模様

### 【著者名】

N1656W

### 【作者名】

依櫻

### 【あらすじ】

家庭教師ヒットマンリボーンの一次創作作品です。

平凡な女の子が沢田綱吉くんに恋をしていく過程を書いたお話です。

## プロローグ

好きになど、なりたくなかった。だって、私の恋は叶わないとわかつているのだから。なのにどうして、想いは溢れるのだろう。

「ツナ君、おはよ。」

「おはよ。京子ちゃん。」

私の隣で明るい声で挨拶を交わす2人。笹川京子と沢田綱吉。私は沢田くんとは数えるほどしか話したことがない。2人が私の隣で会話を楽しんでいるのは私と京子が友達で、京子が私の席に話に来ているからだ。

「えっと、西崎さんもおはよ。」

「おはよ。」

私はちらり、と沢田くんの顔を見てすぐに視線を戻して挨拶を返した。素つ気ない私の態度に沢田くんが苦笑いしているのが声でわかつた。

「おい、西崎！10代目に対してなんだその態度はー。」

出たな、忠犬。大声で現れたのは沢田くんの忠犬、獄寺隼人。何だから知らないけど、誰にも媚びたりへつらつたりしない彼が沢田くんにだけは従つている。私としては鬱陶しいだけなんだけど。

「あんたにとつては大事な10代目なんだろうけど、私にとつて沢

田くんはただのクラスメート…どんな態度とったって問題ないと思ふんですけど？」

立っている獄寺くんを睨みつけながら言えば、彼はわなわなと震えていた。

「相変わらず千景は厳しいな。」

ピリッとした空気を破つたのは幼なじみの山本武だった。いつも通り「ココニコ」と笑いながら沢田くんの隣に立っていた。

武が沢田くんたちとつるむようになったのは中学の時から。沢田くんと関わってから武はちょっと変わった。何がって言わると言えなければ、一つ上げるとしたら、友達を何よりも大切に想つようになつたと思つ。

「山本、おはよう。」

「はよ、シナ。」

獄寺くん程ではないが武も沢田くん至上主義っぽいところがある。以前一度だけ聞いた時、彼は沢田くんに多くの事を教わったのだと言つていた。

沢田綱吉。

みんなが彼に魅せられる。それは勉強が出来るからとか、運動神経がいいからとかではない。といつかそもそも沢田くんは勉強できなし、運動神経はよくない。でも、みんなにはそんなこと関係ないのだ。沢田綱吉には人を惹きつける力がある。

## 1・1 笑顔

私が笑つたら、君はとても嬉しそうに笑つた。・・・変な人、そう思うのに私から零れたのはやっぱり笑顔だった。

「山本くんかっこいいなー。」

広い方のグラウンドで野球をする男子を眺めながら友人の伊藤美砂緒は惚れ惚れと呟いた。美砂緒お目当ての武の方をじつと見るが別段格好よく見えるわけじゃない。たぶん武は格好いい部類に入るのだろうけれど私には野球が大好きなただの男の子にしか見えない。

「ばかね、美砂緒。あんなのただの野球バカじゃない。」

野球の見学をしていた私たちの元にやってきたのは黒川花。 同い年とは思えないほど大人びていてお姉さんみたいな人だ。

「何よ、花。山本くんは十分かっこいいよ。」

むつとした様子の美砂緒に花はやれやれ、と言つた感じでため息をついた。

「男はやっぱり年上よ。牛柄のお兄さんのような。」

「花、それも違うと思う。」

京子の友人であるだけに花もなかなか突っ込みどころのある友人であると思う。ちなみに花の言う牛柄の人はたぶん黙つていれば格好いいのだと思う。私も中学のときに何度か遭遇した。でも、格好い

いといふかへタレつぽい感じだつた。

「何よ、千景。じゃああんたはどんな人がいいのよ。」

どんな、と言われ私は返答に困る。別に格好いい人を好きになるわけではないし、何で相手を好きになつたのかなんてはつきり言ってわからない。

「私は強い人がいいな。」

柔らかい声色に振り返れば笑顔で佇む京子がいた。

「強い人? 何、空手のチャンピオンみたいな人がいいの?」

「力じゃなくて心がだよ。」

そう言つて京子が微笑みを見つめる先にいたのは沢田くんだった。ああ、京子も沢田綱吉という人に惹かれた1人だつたんだ。沢田くんを見つめる京子の表情は柔らかくて、すごく綺麗だった。そんな彼女をボーッと見つめていたら視界の端に白い物を見た。

「京子つー。」

咄嗟に体が動き、私は自分より背の低い京子を覆うように抱きしめた。肩に鈍い痛みが響く。

「つー。」

「ちかちゃんー。」

飛んできたのは野球のボールだつたらしい。目の前で泣きそつた顔をする京子に苦笑する。

「そんな顔しなくても大丈夫だよ。」

「ほんほん、と京子の頭を撫でていると、ちらに駆けてくる足音が聞こえた。

「悪い、大丈夫か？・・・って当たったの西崎？」

「そうですが？」

駆け寄ってきた男子生徒は申し訳なさそうな顔から一転笑顔になつた。

「なら大丈夫だな。笹川さんに当たつたと思ったから超焦つた。」

「顔面か？顔面に一発入れて欲しいのか？」

男子生徒の肩を掴み、殴る準備をする。

「殴れ、千景！女に当てるなんて最低！」

「ちか、本当に大丈夫？」

「ちかちゃんにちゃんと謝つて！」

3人の女子、しかもアイドルの京子にまで非難され、男子生徒もたじたじだ。

「「」めん、西崎さん。俺がボール取り損ねたんだ。」

謝罪の言葉を口にしたのは田の前で肩を掴んでいる男子生徒ではなく、その後ろから現れた沢田くんだった。

「そ、そうだ！全部沢田が悪い。」

「そんなわけあるか。」

私は宣言通り、男子生徒の顔面をグーで殴った。

「いってーーお前なーー！」

「今のはおめえが悪いな。」

「謝る」とも肝心だぞ、田中。」

あ、田中って言つんだこの人。武と獄寺くんに挟まれてしまつた男子生徒、田中くんを見て、私は場違いなことを考へる。

「それよつちかちゃん、肩大丈夫？」

京子がそつと触れた肩に強い痛みが走る。だが痛がるそぶりなど見せない。京子たちに心配かけたくないのだ。

「大丈夫。そろそろ授業終わるし戻る?」

そつと離つてその場を去る。だが痛みのある肩とは逆側の腕を掴まれ、私は動けなかつた。驚いて振り返ると私の腕を掴んでいるのは沢田くんだった。

「ダメだよ。ちゃんと見てもらおう。俺が付き添つからみんなは戻つて。」

「ちよつー沢田くんーー？」

強い力ではないけど有無を言わせぬ雰囲気で沢田くんは私の腕を引いて保健室に連れていく。戸惑いつつも私は沢田くんに従つた。

「失礼します。」

「なんだボンゴレジやねーか。俺は男はみねーぞ。」

「その台詞は医者としてどうなんだー？？？つーか、怪我したのは俺じゃなくて西崎さん。」

保健医のシャマル先生は男を見ないことで有名。女好きの変態なのが何故か女子生徒からの人気は高かつたりする。それよりもシャマル先生と沢田くんが親しげなことに驚く。

「西崎ー？？？つおおー千景ちゃんー！」

突然こちらに突進してきたシャマル先生。私は反射的に保健室の扉を思いつきり閉めた。バンつーというもののすごい音が聞こえた。

「容赦ねーー！」

「お、思わず・・・。」

恐る恐る扉を開けるとシャマル先生が完全に伸びて倒れていた。

「 「 」 」 」 」

「えっと、中に入らうか。」

「うん。」

沢田くんに促され、私たちはシャマル先生の体を踏みつけて・・・  
じやなかつた、乗り越えて保健室の中に入った。

「じゃあ肩見せてくれる?」

「・・・沢田くん、大胆だね。」

「え?」

私の言つた意味が分かっていない沢田くんに悪戯心を刺激されながら私は負傷している右肩の体操着を少しずらした。

「...」

みるみる沢田くんの顔が赤くなつていぐ。まあ当たり前なんだけど、  
肩に湿布貼るにはブラの肩紐が見え  
ちゃうんだよね。武とかだつたら平然としてそうだけど沢田くんは  
見るからに純情そつだし。

「沢田くん恥ずかしいよ。」

恥じるよつて少し俯きながらになつてみた。

「お、お、俺、そんなんつもりじゃー。」

かなり動搖している沢田くん。面白すぎて笑いを堪えるのがつらー。

「・・・西崎さん、笑つてない？笑つてるよね？」

「わ、笑つてないよ。」

「いや、声笑つてるし、肩震えてるからー。」

「じつやら誤魔化せていなかつたらしい。そつとわかつたらもう隠す必要はないので私は声を挙げて笑つた。だつて高校生にしてこの純情さは貴重だと思つよ。」

「笑いすきー。」

「「」、「」めぐ。でも、可愛くつて。」

「それ褒め言葉じゃないからねーー？」

「えー、褒めてるのー。」

「俺男だからねーー？」

突つ込み続ける沢田くんに私は珍しいくらいケラケラ笑つた。そんな私の様子を見て、彼の表情が少し変わつた。

「じつしたのー。」

「いや、よかつた、と思つて。」

「？」

意味がわからなくて、私は首を傾げた。

「西崎さん俺と話すときは笑つてくれないから嫌われてるのかと思つてた。」

そんなつもりはなかつたのだが元々そんなに笑わない私は自然と無表情で接していたのだろう。言葉もきついつよく言われるし。

「だからよかつた、と思つて。」

そう言つて沢田くんはすぐ嬉しそうに笑つた。変な人。私はただ面白かつたから笑つただけなのに。変な人。そう思つけど、沢田くんの笑顔を見えていたら私まで自然に笑顔になつていた。

学校帰り、私は真っ直ぐバイト先である叔母の家に向かつ。

「ただいま、穂月さん。」

「おかげり、千景。」

にっこり微笑む楠木穂月さんは私の自慢の叔母さんである。穂月さんはレトロな雰囲気の喫茶店を経営している。私はここに空気と穂月さんの淹れてくれるコーヒーが大好きだ。物心ついた時にはここにいて、高校生になつてからはバイトとして働いていて、最近では時々コーヒーを淹れさせてもらえたよつになつた。

「あんた毎日毎日ここにこつるけど、他に行く場所ないの?」

寂しい子だね、穂月さんはそう言つてため息をつくけど、武が野球に夢中になつて他のことが疎かなのと同じで私はコーヒーに夢中なのだ。全然寂しくなんてない。

「やう言へば、今日も来てるよ、あの坊や。」

そう言つて穂月さんが指差した先にいたのは赤ちゃんなのに黒いスリッパが妙に似合つてゐる最近の常連さん、リボーン。くん付けしたら呼捨てでいいと言われた。やつぱりちょっと不思議な赤ちゃん。

「ひんむけよ、リボーン。」

私は挨拶と共に私の淹れたエスプレッソを出す。リボーンはここ

来ると必ずエスプレッソを頼むのだ。最初は穂月さんの淹れるものしか飲んでくれなかつたのだが最近は私の実力を認めてくれたのか飲んでくれて、しかもアドバイスまでしてくれる。

「千景か。・・・また上達したな。」

エスプレッソを一口すすり、リボーンは一ヒルな笑みを浮かべて言つた。リボーンがお世辞を言わないと知つてゐる私はお褒めの言葉を素直に受け取り、嬉しさに頬を緩める。

「西崎さんー？」

びっくりして背筋を伸ばし、お店の入り口を見やれば「ひらもびつくりしている沢田くんがお店に片足を踏み入れた状態のなんとも微妙な格好で立つていた。

「何してんだ、ダメツナ。さつさと入れ。」

「ダメツナ言うなー」

「沢田くん、リボーンと知り合い？」

「俺はツナの家庭教師なんだぞ。」

リボーン、赤ちゃんじゃないの？ますます不思議な赤ん坊だ、と心で呴きながら「ちらりに歩いてきた沢田くんを見やれば、彼は何故かスーツを着ていた。

「沢田くん、その格好・・・。」

「「、「これは・・・。」

「就活?」

「俺らまだ高2だよね!?」

沢田くんの見事な突っ込みに私は確かに、と納得する。でも、だつたらどうしてスーツ?しかも結構高そう。

「ツナは仕事の手伝いに来たんだぞ。まあ、バイトみたいなもんだ。

」

スーツ着てバイト?しかもここで?色んな疑問は浮かんだがそこで私が関わるべきではないと思い、そうなんだ、と返すだけに留める。冷静なリボーンの隣で沢田くんが安堵の息をついている辺り何かあるのだろうが、沢田くんがほっとしているなら、聞かなくてよかつた、と思つた。

その後、お店にやつってきたのはやっぱり黒いスーツに身を包んだ人たち。沢田くんとリボーンは彼らと向かい合い、何かを真剣に話し合つていた。真剣な顔をした沢田くんの横顔は私の知る幼さのある彼ではなく、男の人だった。ドキリ、としたのが三分の一。寂しいと感じたのが三分の一。まるで知らない人のようで、遠い人のようで。昔の古傷が疼いた気がした。

君の笑つた顔を見ると、何故か私は切なくなるの。ついこの間まで近くに感じていた君を今はとても遠い人のように感じる。あの人のように・・・。

喫茶店で沢田くんと遭遇した翌日、彼は私を避けるように田も合わそうとはしてくれなかつた。たぶん、仕事中の自分を見られたのが嫌だつたんだろう。だからつて避けなくともいいと思つたが・・・。

「ちか、もう進路調査だした?」

ぼーっと沢田くんの後姿を追いかけていたら、美砂緒が声をかけてきた。慌てて意識を戻し、質問を繰り返すよつ田だけで訴えれば、美砂緒は読みとつてくれたのかため息をつく。

「だから、進路調査。」

「ああ。・・・まだ。美砂緒は?」

「まだ。まだ高2だよ?進路なんてわかんないよ。」

「逆。もつ高2でしょ。来年は受験で卒業だよ。」

「先の」と言わぬいでよ~。」

淡々と言えば、美砂緒はしゃがみ込んで机に突つ伏した。そんな彼女に聞こえないようにため息をつき、自分の将来を考える。みんな

口には出さないけど、色々考へてゐるんだらう。……私は？私は何がしたいのだらう。コーヒーを淹れるのは好きだ。でもだからといつてそれでどういふのよ」とこつとく『氣はない』。

「どうした、千景。元氣ねーじゃん。」

「……武か。」

ちら、と声の主である武を見上げ、それがわかると興味が失せて、私は視線を再び遠くに飛ばす。別の人に入れをやるとものす『い』怒られるけど、武はこれが私の考へ込んでいる時の癖だと知つてるので文句は言つてこない。

「山本くんは進路決まつてる？やつぱりプロ野指すの？」

「ん~。どうだらうな。」

美砂緒の質問に武ははつきりとは答えなかつた。中学までなら確實に領いていたであろう質問。私は不思議に思い、思考を中断して彼を見上げた。そこにいたのは曖昧な笑みを浮かべ、私の知らない顔をする武。17年間ずっと一緒にいたけど、こんな彼の顔は見たことがない。いや、ずっと一緒にいたというのは語弊がある。たぶん、私が知らない武は一杯いる。武の知らない私がいるように。

「伊藤は？」

「私はまだなの。」

頬を染めて話す美砂緒。そう言えど、この子は武が好きなんだつたつけ。ということは私は邪魔者かな。そう思い、私は席を立つて廊

下に出る。昼休みはあるし、自販機で飲み物でも買おうかと一階の購買に向かえば、自販機の前には沢田くんがいた。珍しく獄寺くんはおらず、彼は一人だった。

「お金ないの？」

ぼーっと立っている沢田くんに尋ねれば彼はびっくり、と肩を揺らし、困った顔で私を振り返った。そんな顔をされてしまう悪いことをしている気持ちになる。

「沢田くん、今日ずっと私のこと避けてない？」

「そ、そんなつもりじゃ……。」

「昨日のこと、私は別に問い合わせたりしないよ。」

「え？」

ポカン、とした沢田くんを一瞥し、自販機から一歩退いた沢田くんに一言言つて私はお金を投入する。なんとなく「ちごミルクな気分」だったのでそれにする。買い終わつてもう一度沢田くんを見れば、彼は相変わらずポカン、としていて、その表情が愛らしくて、思わず笑つてしまつた。

「な、何で笑うのー?」

「「」めん、なんか反応可愛いんで。」

「前も言つたけどそれ嬉しいからねー!？」

突つ込みを入れる沢田くんはいつも沢田くんで私は笑いを止められない。ひとしきり笑い終わつた頃には沢田くんは少々不貞腐れた様子で立つていた。

「いいんだよ、沢田くん。」

「え？」

「話したくないことを無理に説明する必要なんてないから。人間には黙秘権があるしね。」

「・・・壮大な話になつたね。」

冷ややかに突つ込みを入れる沢田くんに苦笑し、しかしその笑みはすぐに解かれ。

「人にはさ、誰にだつて話したくないことはあるよ。だからさ、無理に話さなくていいと思う。私も無理に聞いたりしない。」

「うん。ありがと。」

ほつとしたように笑う沢田くんはやつぱり、遠くに感じた。

「でもさ、沢田くんには武や獄寺くんがいるんだから抱えきれなくなつたら頼つていいと思つよ。2人ともきつと喜んで協力してくれるから。」

「うん。」

何故だらう。ついこの間まで近くに感じていたのに。笑った顔をみ

るとつられて笑顔になってしまったのに。今は何故か・・・切なくなる。遠くに感じるの。どうして?どうして私は、それを寂しく感じるの?

「戻りうか。」

「西崎さん。」

「ん?」

振り返ると沢田くんは心配そうな真剣な表情で私に尋ねた。

「西崎さんには話せる人がいる?」

「・・・いいの。私は、誰にも話したくないから。」

それはいなって言ひてるようなものなんだけど、でも私はそれでいいから。だって、誰にも話したくない。

誰にも知られたくないの。・・・3年前の恋のこと。

## 1・4 悩み

私は彼に出会ったことを後悔しているのだろうか。彼からの連絡が途絶えてもう2年。私は、まだ待ち続けるのだろうか。まだ、彼の事を想っているのだろうか。

沢田くんに投げやりの言葉を言つてしまつてからというもの、彼は時折心配そうに私を見る。人の良さそうな沢田くんのことだ。あの言葉を聞いて私が何か抱えているのではないかと心配してくれているんだろう。あの日言つたことは私の本心だし、撤回するつもりはない。誰かに話して困る話でもないのだけれど、誰にも何も言つて欲しくないから。だから言わないだけ。だから沢田くんが気にする必要なんてこれっぽっちもないのに。

「だから、ここに来てまでそんな顔しないでくれる?」

私は苦笑しながらカウンター席に座る沢田くん言う。そんな私に沢田くんは困ったような笑顔を返す。本当に、莫迦な人だと思う。友人に対してならまだしもただのクラスメイトの私をそんなに心配しなくてもいいのに。

沢田くんは最近よく、私のバイト先、つまりは叔母の穂月さんの喫茶店に顔をだすようになった。大抵はリボーンの仕事のお手伝いで、後は息抜きだ、と言つて。よくわからないけど、このお店を気に入ってくれたのなら嬉しい。

「そんなんに顔に出てた?」

「うん。」

真顔で頷けば、沢田くんは苦笑いを浮かべる。彼らしくない、綺麗な笑い方。何て言つたか、作り物みたいな。沢田くんは隠し事ができないタイプだと思ってた。慌てるときも嬉しい時も隠せずにすぐには顔に出てたから。傍から見てる私でもわかるくらい。でも、最近の彼はよくこうやって誤魔化すような綺麗な笑いを浮かべる。まるで、感情を表に出さないようにしているみたいだ。

深くなつていこうとする思考に蓋をして、私は沢田くんにカプチーノを出す。リボーンのお仕事を手伝つている時は他の人と合わせてコーヒーを飲んでいるけど、沢田くんはコーヒーが苦手らしい。だから彼の好みに合わせた少し甘めのカプチーノを私は沢田くんが来ると必ず出す。沢田くんもそれ以外注文してこない。苦くてダメだといつ彼は同じ年の沢田綱吉くんらしくて少し安心する。・・・何で安心するんだろう?

「誰にも話さなくてつらくならないの?」

「へ?」

間抜けな声を上げてしまつた。じつと見つめてくる沢田くんに少したじろぎながら彼の質問をもう一度頭の中で考える。えつと、たぶんこの間の誰にも話したくないという発言からの質問だよね。やっぱり心配してくれていたのか、と思つて何故か少し泣きたくなつた。

「・・・だって誰かに話したら褪せてしまいそうだから。」

きっとみんな口を揃えて言つ。2年も連絡をよこさないような奴、待つだけ無駄だと。自分でその言葉を言つのはいい。でも、人に言われたら、ずっと大切にしてきたあの日々が、全部嘘に思えてしまいますで、私の大切にしてきたもの全て偽りに変わつてしまいそう

で、だつたら話したくない。話さなくていいと思つた。

「朝、田が覚めてわずかな希望を抱いて、一日の終わりに喪失感に襲われて。毎日がその繰り返し。」

期待しては裏切られ。でも希望は捨てられなくて。そんなことをもう3年も続けている。なんて、愚かしいのだろう。

「西崎さん？」

名前を呼ばれてはつとする。私は何を悠々と語っていたんだら。唐突に話しだしただけに、沢田くんはきょとん、としている。ちよつと可愛こいと思つた。じゃなくて……！

「いめん、変な話をして。忘れ……。」

「やつ思つ頃より前に戻りたいと思つへ。」

私の言葉を遮り、沢田くんが問いかける。どいか焦りを含んだ声と瞳に私は言葉に詰まる。

「……沢田くんは、戻りたいと思つの？なかつたことにして」と思つの？」

たぶん、今の質問は自分自身に問いかけたものなのだろう。問い合わせた沢田くんはとても罰が悪そうに私から田を反らした。まるで悪戯がみつかつた子どものよう。

「時々、思つんだ。リボーンに会わなければ、俺はずつとダメツナのままだつたかもしれないけど、それなりに平穏な毎日を送れてい

たんじやないかつて。誰かを巻き込むことも傷つけることもなく、  
ただ平穏に。」

「・・・。」

遠い過去を懐かしむように沢田くんは呟くように話す。その瞳は何処か別の場所に向けられていた。もうその頃には戻れない。そう分かっているから、沢田くんはこんなにも悲しそうな顔をしているのだろう。

「例えば・・・。」

沈黙を破った私の声に沢田くんは肩をビクッと跳ねさせ、緩々と顔を上げた。とても不安そうな顔。思わず、大丈夫だよ、と抱きしめてやりたくなる。

「例えば、私の幼なじみの野球バカ。」

「それ、山本だよね・・・。」

いつもの突つ込みに苦笑いを浮かべる沢田くん。ちょっとこいつもの彼らしさを覗かせた沢田くんに私の頬が自然と緩む。

「うん、武。武は野球が大好きでしょ？夢はでつかくプロ野球選手。毎日毎日、それこそ耳にタコが出来るぐらい言つてた。・・・でも、最近は言わない。」

思い当たることがあるのか、沢田くんは気まずそうに手を反らした。

「どうしてなのかは知らないよ。でも、武はプロ野球選手の道を諦

めるくらい大事なものが出来たんだよ。」

「大事な物?」

「人はね、何かを得るためににはそれ相応の代価を支払うの。武は夢を捨ててでもそれを手に入れることを望んだんだよ。」

そう断言できる。武は昔から人気者だった。でも、彼の中で野球が一番で友達は一番だった。それでも彼は人気者だったし、別に薄情なわけでもなかつた。でも、沢田くんと仲良くなつてからは変わつたの。前よりもずっと強くなつた。何がつて聞かれると困るけど、強くなつたつて思つ。武は選んだ。野球でなく、沢田くんという友達を。

「武は何度やり直しても同じ道を選ぶよ。沢田君だつて、リボンと出逢つてたくさんの中を得たでしょ?そして同時に捨てたの。」

そう、私も彼を待ち続けるために時間を捨てた。得る者があると信じて。

「うん。そうだね。」

ほんの少しだけ、彼の表情が和らいだように見えた。

「例えば、私の淹れたカプチーノが飲める、とかね。」

冗談めかしてそう言えれば、沢田くんはいつも笑顔で笑つてくれた。それが嬉しくて私もつられて笑みを浮かべる。

私は私が彼と出逢つて何を得たのかまだわからない。待ち続ける

ことで何かを得られるのかもわからない。だけビ・・・。いつして笑ってくれる沢田くんと出逢うことが出来たのは彼のおかげの気がするから。どんなに苦しくても悲しくても、出会わなければよかつたとは思いたくない。

再会といつのは突然なもので予想外の出来事まで連れてくる。

「千景！外に超イケメンのお兄さんがいるよー。」

「は？」

珍しく興奮している花には悪いがイケメンお兄さんとやらに興味のない私は冷めた反応をとってしまった。

「せつきちょっとだけ見えたんだけど、金髪のイケメンだったよ。」

「ふうん。花。」

「何？」

「帰つていい？」

帰り支度をしつかり終えている私は未だ有頂天な花に笑顔で囁つ。イケメンがどうのこうのという話よりも早く帰つてコーヒーの練習をした方が有意義に決まつている。

私は花に早々に別れを告げ、学校を出た。校門の前にはそのイケメンを見に来たらしい女子で溢れかえっていた。その中に、見覚えのあるススキ色の髪が見えた気がしたのは気のせいだらうか。

バイトを始めてしばらくすると最近ではもう馴染みの顔となつた人が現れた。

「いらっしゃいませ、沢田くん。暇なの？」

「笑顔で毒吐かないで！？」

来店早々華麗な突っ込みを入れる沢田くん。リボーンが彼をいじつて楽しむ理由がわかる気がする。

「だってスーツじゃないし、仕事じゃないんでしょ？」

「半々かな？たた、今田はそんな堅苦しいものじゃないからさ、」

そう言って入ってきた沢田くんの後ろからそろそろと見覚えのある顔とない顔とが入ってきた。

「つて武!?

「おおー！ そう言えば、お前の叔母さんのことだつたな。

にかつと笑う武、かくん、と肩が下がる。あたしの驚きを返せって言いたくなるくらい普通の反応。

「獄寺くんに了平さんに雲雀さんに知らない女の子・・・沢田くん  
どつかの不良のボスみたいだね。」

「うーん？」

笑つてそつと言えば、沢田くんは変な声を上げ、慌てふためく。・・・  
私、何か悪いこと言つたやつたのかな。

「ああ、おまかせだよ。」

「？・・・え? と、ありがと「J? もう?」

雲雀さんに褒められ、  
わけのわからないままお礼を言ひ。

「10代目を困らせるんじゃねえ！」

煩い獄寺くんと私が睨みあつていると沢田くんは慌ててみんなに座るよう指示をした。沢田くんに声をかけられたことで獄寺くんは一気に表情を明るくさせ、席についた。この沢田くん至上主義め。殴つてやりたい衝動にかられたがなんとか落ち着きを取り戻し、オーダーに向かう。

「可愛いお嬢さんは何にします？」

「え？」

私はまずメンバー唯一の女の子に声をかけた。

「お前はホストか！」

獄寺くんが突っ込みを入れてきただけで、そこは華麗に無視。私と彼はまさに水と油。合わないんだよね。

「お勧めはエスプレッソですけど、沢田くんのようひに苦い物が苦手でしたら甘めのカプチーノもお作りしますよ。」

「お子様ですみませんね！」

「そんなこと言つてないのに。」

「じゃあ甘めのカプチーノで。」

「はい、かしこまりました。」

沢田くんはいつものカプチーノ。獄寺くんと良平さんはエスプレッソ、雲雀さんは紅茶で武は特別オーダーの緑茶。

沢田くんと不思議メンバーは雲雀さんとクロームちゃんという女子意外楽しそうに話している。私は全員分の飲み物を穂月さんと共に淹れ、彼等の元に運んで行く。近づいていくと金髪の髪が見えた。その後姿に私の思考は停止する。

そんなはずない・・・。

「ディーノさんもとうとう結婚か。」

ディーノ。その名前に私の心臓が大きく跳ねる。

「羨ましいか、ツナ。」

結婚・・・？

食器が床に落ち、割れる音が店内に響き渡る。その音に全員の視線が私に集まる。彼も私を見る。

「千景・・・！」

「・・・。」

2年前、連絡の途切れた彼が、ディーノがそこにいた。  
人を連れて。  
・・・女の

## 1 - 6 過去？

彼と私が出会ったのは私がまだ中学1年生の時だった。

もうだいぶ学校生活にも慣れ、通学路をいつものように歩いて帰つていると目の前で躊躇して転んだ人がいた。それは見事な転び方だった。

「・・・大丈夫ですか？」

声をかけるか一瞬悩んだが目の目でこいつ派手に転ばれては見て見ぬふりは出来ず、私は彼に近づいた。

「ああ、大丈夫だ。」

そう言って顔を上げた彼は凄く整った顔をした所謂美青年だった。日本人にはない雰囲気に金髪。どうみても彼は外国人。しかし彼の紡ぐ日本語は癖もなくとても綺麗だった。

「ちょっと聞きたいんだが、並中つてどこにあるんだ? なかなか通り着かなくてよ。」

「並中はすぐそこですけど。」

私の言葉に彼は目を瞬かせる。その顔は少し幼くて、可愛いと思った。私は彼にわかるように道を説明した。彼は日本語が堪能だったので日本語の説明だけで十分に理解してくれたので助かった。

「いやー、助かった。ありがとな。」

につり笑い、彼は歩き出した。と、同時に転んだ。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だ。」

たぶん顔面を強打したのだろう。彼は顔を抑えて答えた。そして立ち上がり、何故かまたすぐにこけた。

全く進まない。ある意味天才的なドジさ。私はため息をつき、彼に手を差し出した。

「並中まで送ります。」

「いや、大丈夫だつて！」

「田の前で3回も頃ばれたら説得力がありません。」

もう一度ため息をつき、彼の腕を掴んで引っ張った。

「腕を掴んでください。」

「なんか、お前の方が年上みたいだな。」

「あなたが頼りなさすぎるんです。」

「言つてくれるな～。」

そう言つて彼は笑つた。いや、そこは怒るところだから。なんとも

独特な世界を持つた人だ。呆ながら見上げると彼のおでこからは血が出ていた。

「血がってる。」

私は背伸びをしてハンカチで血を拭う。

「あ、おい！汚れちまうぞ！」

「そもそもハンカチは汚れを取るものなんです。問題ありません。」

すり傷程度の怪我だったので血もすぐに止まりそうだった。そのことに安堵しつつ、私は鞄から絆創膏を取り出し、彼のおでこに張つてやつた。

「これでよし。・・・・・」

張り終わってから彼との距離があまりにも近いことに気がついた。男子とあまり接点のない私はこんなに男の人に近づいたことがない。頬に熱が集まるのを感じる。

「どうした？」

「な、何でもあつません！」

慌てて彼から放れようと腕を掴み逆に引き寄せられてしまつた。

「…。」

「照れてんだる。可愛いな。」

彼は優しく笑い、私の頭をぽんぽん、と撫でた。

どこか冷めた所があり、しつかり者と思われている私は可愛いと言われたこともこんな風に頭を撫でられたこともなかつた。余計に恥ずかしくなつてさつきより頬が熱くなつた。

「男をそんな顔で見るもんじゃねえぞ。」

「え？」

自分がどんな顔をしているのかなんてわからなくて、私は戸惑いの声を上げる。するとじばりくして彼の手が私の頭から放れた。それを少し寂しく思う。

「俺は『ティーノだ。お前の名前は?』

「・・・西崎千景。」

それが私と『ティーノの出逢い』だつた。そして、私が生まれて初めての恋をした日。

## 1・7過去？

「よひー・十景。」

学校を出ると同時に時々顔をかけられた。金髪の美青年。

「ディーノ。・・・暇なの？」

「一言囁がそれか！？」

ディーノと出逢った中1の春から約2年。私は中3になっていた。ディーノはあの出会いからとこつものほほ毎日のように並んでいた。待ち伏せしている。

口では辛辣のこと言つが私自身毎日のようにディーノに会えるのは正直嬉しい。

初めて出会ったあの日から私は彼に恋をしている。

初めて会ったあの日から、私は日よりとて彼を好きになる。まるで強力な磁石で吸い寄せられるかの如く彼に惹かれている。

「おひと、電話だ。」

「早く出なよ。」

「悪いな。」

一言私に詫びを入れ、彼は携帯を開いた。瞬間、いつも明るい笑顔を浮かべている彼の表情が曇る。

「……はい。……その話は既にお断りしているはずですが。」

ディーノは時折、こうして私にはわからないような難しい話をする。そんな彼を見ると自分がとてもなく子どもに見える。置いてけぼりをくらつたような気持ちになる。

どんなに背伸びをしたってわたしはまだ14歳の女の子。ディーノからすれば私は子どもでしかないだろう。それがとても寂しい。

お願い。置いて行かないで。

「千景？」

「え？」

いつの間に電話を終えたのか、ディーノは不思議そうな顔で私を見つめ、指さした。彼が指差したのはディーノの腕を掴んでいる私の手。

「……」

私は慌てて手を放す。無意識の行動とはいえ恥ずかしすぎる。頬に熱が集まるのを感じる。絶対に今、私の顔は真っ赤だ。そんな顔をディーノに見せるのは憚られて、私は彼よりも一步前を歩きだした。

「千景、俺、イタリアに帰るよ。」

「・・・え？」

私は足を止め、彼を振り返った。彼の言葉を何度も、何度も頭の中で反芻する。

今、彼は帰ると言ったのだろうか。イタリアに、彼の故郷に帰ると言った？

「何、で？」

絞り出した声は微かに震えていた。一時帰国であればこの一年にだって何度もあった。でも、そうななりそつとディーノは律儀に私に帰る日取りまで教えてくれる。

でも今回は違う。

こんなに真剣な表情をしたディーノを私は知らない。彼はきっと、もひ日本には戻つてこない。出来ることなら「冗談だと書いて欲しい。

「元々、俺はイタリアの人間だし、そろそろ仕事をしないとな。」

苦笑を浮かべ、ディーノは私に歩み寄り、大粒の雨を降らす私の瞳から涙を掬つた。

「聰いな、千景。お前の想像通り、俺はきっと今までのよひに日本に来ることはないと思う。」

そんな風に笑つて言わないでよ。涙で歪む視界だったがディーノが笑っているのは何となくわかった。何かを耐えた笑みだということも。

「好き。」

私の発した言葉に私の頬に触れていたディーノの手が震えたのを感じた。

「好き。」

あなたの事を何にも知らない私だけど、大人なあなたには不釣り合いなほど幼い私だけど、それでも好き。

放れたくない、会えなくなるのは嫌だと、心が訴えている。

それぐらいあなたが好き。

私を真っ直ぐに見つめてくれるあなたの瞳が、優しく包み込むように笑うあなたの笑顔が、時折意地悪なあなたが、大好きなの。

頬に触れているディーノの手に自分の手を重ねる。

「さよならなんて、嫌だよ・・・、ディーノ。」

重ねた手を握られ、私は彼に引き寄せられた。そして力強い腕に包まれた。愛しい人の腕の中。驚きで、涙が止まつた。

「俺だって、お前が好きだ。」

耳元で囁かれた声は震えていた。しかしそれは何よりも甘い言葉だった。

「放れたくないし、放したくない。お前とずっと一緒にいたい。」

満たされて、幸せなはずなのに、私の瞳からは涙がまた溢れだしてきた。でもさつきの涙とは違う。悲しいんじゃない、これは嬉し涙。私の想いにあなたが答えてくれた。

「千景、いつになるかわからないけど、お前を迎えて来る。だから、それまで待つてくれるか？」

私が泣き止み、落ち着いた頃、ディーノはそう言った。いつもは輝かしい笑顔を浮かべている顔が今は何処か不安げでそれさえも愛おしい。

彼がいつになるかわからなこと言うのだ、本当にいつ迎えて来れるかわからないんだろう。

それでもいいと思つた。それでもいい、彼を待つていいよと思つた。  
「待つてる。私はここで、自分の夢を手描しながらディーノが迎えに来るのを待つてるよ。」

そう言つて微笑めば、ディーノは一瞬泣きそうな顔をしてそして私に触れるだけのキスをくれた。

「出発までも少し時間がある。だから、別れがくるその日まで一杯一緒にいよう。」

その言葉通り、私たちは出来る限りの時間を一緒に過ごした。

今まで通り放課後は夜まで一緒に過ごしたし、休みの日は少し遠出

もした。遊園地も行つたし、水族館にも行つた。私がお弁当を作つてピクニックにも行つた。

離れている間も思い出が2人を支えてくれるよつこと、互いを忘れないよつこと。

そして、春から夏へと季節が変わつとした頃、ディーノは日本を旅立つた。

中学3年生の私は実つた初恋に夢中だつた。夢中で、そして信じて疑わなかつた。

彼はきっと迎えに来てくれる。いつも自分達の心は繋がつてゐる。

そう、勘違いしていた。

裏切られる日はすぐそこに迫つてゐたところに。

ディーノが旅立つてしまはこまめに彼から連絡が来ていた。しかし、それも時が経つごとに減つていき、そして、季節が夏から秋に変わつた頃、彼からの連絡は完全に途切れだ。

会いたかった人との再会は、私の予想を上回る最悪なものとなつた。

ディーノと再会したからって私の日常が何か変わるのかと言つたら特に何も変わらない。いつもと同じ学校に行つて、授業を受けて、友達と話して、帰つて、寝て。今までと何も変わらない。日常とうサイクルにたいして大きな変化は起きない。

いや、起きているか。

手に持つた空のマグカップを見て、私は苦笑する。あの日から、私は穂月さんのお店に顔を出していない。ディーノと再会したあのお店に行くことができなかつた。穂月さんは私の気持ちを汲んで、長いお休みをくれた。

「莫迦みたい。」

今まで何してたの？

あの人誰？

結婚つて何？

・・・どうして、突然現れて私をかき乱すのー？

頭を廻る同じ言葉に苛立ち、私は持つていたマグカップを床に叩きつけた。床に落とされたマグカップは音を立てて割れ、破片が床に

散らばった。

悲しいのか、憎いのか、悔しいのか、わからない。全部かもしれない。頭がぐちゃぐちゃで、心もぐちゃぐちゃで、ただ、苦しい。でも涙は出ない。出るのは自嘲的な笑い。

「莫迦みたい。」

何度も同じ言葉を繰り返す。そうだ。私が莫迦だった。2年も彼を待っていた私が莫迦だったんだ。本当だったら連絡が来ない時点で忘れるべきだったのだから。なんて滑稽なんだろう。なんて、愚かなのだろう。

「西崎さん！」

学校の帰り道、聞き覚えのある声に振り返る。そこにいたのはティーノと再会して以来言葉を交わしていなかつた沢田くんだった。正確には私が避けていたから話してなかつたのだけど。左右には獄寺くんと武もいた。

「何？」

正直、彼らとは話したくなかった。だって、話題はティーノのことには決まってる。彼の話なんて聞きたくない。

「わかつてんだろ。跳ね馬のことだ。」

「跳ね馬？」

「あ、ティーノさんのことな。」

聞き覚えのない呼び方に首をひねれば武が補足してくれた。ああ、でも結局ティーノのことか。私は彼等から視線を外し、小さなため息をつく。

「ティーノとは別に何でもないよ。ただせっかく話したことがあるだけ。」

「そんな相手に、お前はあんなに動搖すんのかよ。」

かわそつとする私の言葉を許さないといつぱりに獄寺くんは厳しい口調で言った。確かにそんなことで動搖するわけがないと自分でも分かっているので彼を睨むことしか反撃が出来ない。

「西崎さんの誰にも話せない秘密つてティーノさんとのこと?」

ああ、彼にはそんな話をしたんだつけ。

「そうだよ。毎日、毎日、彼からの連絡を待つて、今日は連絡が来るんじゃないか、今日こそこそは校門の前から顔を表すんじゃないか、明日は、明後日は・・・。そうやって、ずっと待つてた。ずっとティーノを待つてた。」

でも、もう待つたって意味がない。彼にはもう別の人いる。私は、ただ気まぐれで構われてただけ。それを本気と勝手に思つて待ち続けるだけ傷ついてるだけ。ああ、ばかばかしい。

「西崎さん・・・。」

「何かを失つて何かを得るつて言つたけど、あれ嘘かもね。私は何も得なかつた。」

「出会わなければよかつたと、思つ」とだけはしたくなかった。でも・・・。

「こなことなら、ディーノに出会わなければよかつた。」

「それは違うよ。」

強こ言葉に否定され、私は田を開き、沢田くんを見た。

びつして、そんな顔するの？

今こも泣き出しそうな、悲しそうな顔。びつして君がそんな顔をするの？

「ディーノさんと出逢つて嬉しかつたことだつてきつとたくさんあつただろ？」

「・・・うそ。」

そうだ。全部が全部悲しい思い出なんかじゃない。ディーノと過ごした日々に私は確かに幸せを感じていた。ディーノにとつて遊びでも、それでも私は確かに彼からたくさん幸せな気持ちをもらつた。

「そんでな、千景。俺たちからひとつ提案があるんだ。」

「ん？・・・てこりか、武のその類はどうしたの？」

最近顔を合わせていないから今『仮』がついたけど、武の頬には湿布がしてあつた。野球の練習で怪我でもしたのだろうか。

「これか？『気にすんな。』

「にっこり笑つて『言つ武に私はそれ以上の追及を諦めた。笑つて気にするな、と』言つときは絶対にその理由を教えてくれないから。私はため息をつき、頷いた。了承の意を示した私に武の表情は少し和らぐ。

「それで、提案つて？」

「『ディーノさんともう一度話ををしてみない？』

「ディーノと？」

「跳ね馬はもうすぐ婚約パーティーをするんだ。その席には俺達も呼ばれてる。一般人のお前は本当だったら入れねえんだが、俺たちが機会を作つてやる。」

獄寺くんの説明は分かりやすかつたがわからないこともたくさんあつた。まずパーティーが開かれるということは2人がそれだけ上流階級の人つてことだ。そしてそれに沢田くんたちも呼ばれている。

君は、君たちはいつたい何者なの？

「詳しいことは話せないんだけど、やつぱり、ちゃんと決着をつけた方がすつきりするんじやないかと思つて。」

私の心中を読みとったように沢田くんが補足をいれる。たぶん、何者なのかっていうのが、沢田くんが私や他の人に聞かれたくない事柄なんだろう。

「10代目からの提案だからな。俺達も出来る限りのことはする。」

「うん、ありがとうございます。・・・ようしくお願ひします。」

私は彼等に頭を下げる。ティーノと会つて何を話したらしいのかわからぬけど、でも、終わりにしなくちゃいけないから。

空が夕暮れから星空へと変わる頃、キャッバローネの屋敷では賑やかなパーティーが行われていた。

今晩は、ディーノと同盟ファミリーであるレイデローネファミリーの「ご令嬢との婚約パーティー」が開催されているのだ。

ひたすら各ファミリーのボスに挨拶をして回っていたディーノは気付かれぬよつに小さくため息をつく。

「ため息つくと、幸せが逃げますよ。」

そつと差し出されたグラスに驚いて顔を上げれば田の前にいたのはボンゴレ10代目候補の沢田綱吉だった。

ほんの数年前までマフィアは嫌だ、痛いのは嫌だと言つていたディーノの弟分はあつという間に成長を遂げ、今では彼をボンゴレ10代目とすることに異論を唱える者がいなくなつてしまつくらい、綱吉はマフィア界で認められる人物へと成長していた。

「ツナ。・・・ありがとな。」

引きつった笑みを浮かべ、綱吉からのグラスを受け取る。現ボンゴレトップの9代目に代わり、今回のパーティーに出席している綱吉とその守護者たちは先日ござれいざを起こしてしまったのだ。それだけに顔を合わせづらかった。

「山本に殴られた傷、平気ですか？」

「痛みはあるがマイクでカモフラージュしてる。問題ないさ。」

先日のいざこざの際、ディーノは綱吉の雨の守護者山本武に思い切り殴られたのだ。普段は温厚な山本らしからぬ行動ではあつたが大切な幼なじみを傷つけたのだ。手が出て当然とも思える。大人げなく殴り返してしまったし。

「デイー・ノさん。少し、お時間頂けますか?」

綱吉の言葉に首を傾げつつ、ディーノは頷いた。そして彼に連れられて言ったのはバルコニーへと続く窓の前だつた。赤いカーテンが風に揺られている。その向こうで誰かの気配を感じた。

「ボンゴレ10代目の俺がここで護衛するわけにはいかないんで、うちの守護者を2人、護衛についておきますね。」

晴れの守護者篠川了平

雲の守護者 雲雀恭弥

了平はまだしも孤高の浮き雲と謳われる恭弥が護衛なるものを引き受けたことに家庭教師として彼の事を知っているティーノとしては驚きのあまり言葉が出ない。

「骸とクロームには幻覚でディーノさんがいるよ」仕立て上げる  
し、獄寺くんと山本がフォローに回ってくれてるんで何も心配あり  
ません。」

「いや、意味わかんねえんだが。随分な手の込みようだが、なんだ

つてんだ?」

「俺たちのお姫様がお待ちですよってことです。」

それだけ言つて、綱吉は人ごみの中へと消えて行つた。

お姫様。

綱吉の言つた言葉で思い当たる人物はただ一人。 そんなはずはない  
と思いつつ、『ぐぐり、と喉がなる。

「早く行きなよ。 彼女、ずっと待つてたんだからさ。」

「事情は沢田たちから聞いた。 殴つてやりたいが山本がもう殴つた  
らしいからな。 諦めてやる。」

「じゃあ、やつぱり……。」

「だから早く行きなつてば。 いくら沢田綱吉や僕らでもそんなに時  
間をやれないと。」

恭弥に一睨みされ、ディーノは苦笑を浮かべつつ、緊張した足取り  
でカーテンをめくる。 彼女に、この世で愛したたつた一人の人にな  
んと言つていいのかわからない。 誤魔化すべきなのか、正直な気持  
ちを話すべきなのか、ディーノは心を決めかけていた。

「・・・ディーノ?」

懐かしい声に名前を呼ばれ、顔を上げ、ディーノは息を飲んだ。

「千景。」

大人しめな濃紺のドレスに最低限のアクセサリーをつけ、髪を結い上げた千景は先日見た彼女よりも数段に大人っぽく、月明かりが彼女の魅力を引きたてていた。

目の前に現れた彼に私の心臓は鼓動を早めた。沢田くんたちがここで待つてろって言うから待つてたけど、まさか本当にディーノが来るとは思つていなかつたから。

「久しぶり。」

私は自分を落ち着かせ、なんとか笑みを浮かべながらそう言った。実際はうまく笑えていないかもしけないけど、でも決めたから。自分の精一杯でディーノの前に立とうつて。

「どうして、ここに？」

「沢田くんたちが連れて来てくれたの。ディーノと話が出来るのは今日が最後だらうからって。」

「そうか。」

「ああ、ディーノだ。私は唐突にそう思った。」

月明かりで輝く綺麗な金髪。低めの優しい声。ディーノからの連絡が途絶えて時間が経てばたつほどに思った。

私は彼が好きなのだろうか、と。離れている時間が長ければ長いほど、私は自分の心がわからなくなつた。

でも、今わかつた。

私は今でも彼が好きだ。悔しいくらい、大好きだ。

「本当はね、恨み事一杯言つてやるうと思つてきたの。だつて、私の青春は全部ディーノに持つていかれちゃつたんだもの。言いたくもなると思わない?」

「ああ、そうだな。」

「でもね、ディーノの顔見たらそんなのビリでもよくなつちやつた。」

だつて、再び会つたあなたはこんなにも愛おしいから。念えて、こうして話せるだけで嬉しいから。

だからお願ひよ。そんなに悲しそうな顔をしないで。

「何、言つてんだ。責めろよーお前に待つてろつて言つたくせに、突然連絡を絶つた俺をー結婚しようとしてる俺をーお前を縛り続けた俺を!ー」

「責めないよ。だつてそれでも、私はディーノを好きだもの。昔よりずっと、好きだもの。」

呆気にとられたような顔をしたディーノは泣きそうに顔を歪めた。

抱きしめてあげたくなつた。抱きしめて、もういいよつて言つてあげたい。泣かないでつて言つてあげたい。でも、それはやつちやいけないから。

「本当は結婚おめでとうつて言つてあげたかったんだけど、言えないや。」

「え？」

「ディーノの」ことまだ好きだから、おめでとうつて言えないとめんね。」

あなたはもう、私の恋人のディーノじゃない。私が触れていい、ディーノじゃない。どんなにあなたが好きでもあなたはもう、他の女（ひと）のものだから。

「ディーノ。」

未だ窓のすぐ側にいる彼に歩み寄り、そつとその頬に手を伸ばす。触れるか触れないかのぎりぎりの所で私は手を止める。そんな私をディーノは不思議そうに見た。何で、触れないのか、彼の瞳はそう問い合わせていた。素直な彼に私は苦笑する。

「莫迦だな、ディーノ。あなたはもう、私の恋人じゃないんだよ。人の物に勝手に触れるわけにいかないでしょ？」

「そう、だな。」

ディーノの瞳が哀しげに揺れる。それでも笑ってくれる。優しい人。私のためにあなたは笑ってくれる。

「ねえ、ひとつだけ、聞いてもいい?」

「何だ?」

「私のこと、少しでも好きでいてくれてた?私のこと・・・。」

「好きだった!」

私の言葉を遮る強い言葉と共に、私は彼の腕の中に閉じ込められていた。

「好きだった。自分でも驚くくらいお前が好きだった。本当はお前を迎えるにきたかった。自分だけのものにしたかった!」

私を抱きしめるディーノの腕の力が強くなる。

ああ、もう十分だ。もう、その言葉だけで十分だ。

そつと、ディーノの胸を押し返す。私の拒絶にディーノは緩々と拘束を解く。放れていく温もりがこんなにも切ないなんて、思いもしなかつた。

目頭が熱い。泣いてしまいそう。

でも、笑わなくちゃ。こんな私を愛してくれた彼に出来るのはそれくらいだから。

「千景、俺は・・・。」

「ダメだよ、ディーノ。その先は言っちゃダメ。だって、言つたら  
きつとお互に今以上に苦しくなるだけだから。」

拳を握りしめ、唇を噛みしめ、『ディーノは紡』うとした言葉を押し  
殺す。そして顔を上げ、微笑んでくれた。

「もうだな。」

私も彼に笑顔を返す。愛しい人、どうかずっと笑っていて。どうか、  
幸せになつて。

「もう、戻つた方がいいよ。今日の主役でしょ？」

「ああ。」

「「やよつなら、ディーノ／千景。」」

## 1・10進むために

さよなら、愛しい人。誰よりも愛しています。

去っていく愛しい人の後姿が見えなくなるまで見つめていた。これが最後だから。しつかり目に焼きつけておきたかった。

バルコニーへと続く窓が閉じられた音を聞き、私はバルコニーの柵に手をのせ、空を見上げた。今日の月は特別綺麗に見えた。

「西崎さん。」

どれくらいそうしていたのだろうか。声をかけられ、私は我に返った。振り返れば沢田くんが立っていた。スーツを着た彼はやっぱり大人びていて、案外スーツが似合うのだと再認識する。

「沢田くん。」

私はちやんと沢田くんに向き直り、深々と頭を下げた。

「ディーノと話をさせてくれてありがとう。すつきりした。」

「すつきりしたなら、顔上げてよ。真っ直ぐ俺を見てよ。」

「。。。。」

何で、わかっちゃうのかな。

私が頭を下げる理由。顔を見られたくないからだって、何でわかっ

ひやうのかな。

頭の上から呆れたような小さなため息が聞こえた。そして腕を掴まれ、引っ張られたと思つたら田の前に真つ暗な壁が出現した。抱きしめられているのだと気が付くのに数秒かかった。

「これなら顔見えないから。」

「・・・。」

「よく、頑張ったね。」

そう言つて頭を撫でてくれた沢田くんの手がとても温かくて涙が溢れた。

本当は、ディーノを行かせたくなかつた。

びひして、彼の隣に立つのが私じゃないんだろう。

びひして、私は彼の隣に立てないんだろう。

本当は抱きしめ続けて欲しかつたのに。

その背に腕をまわして抱きしめたかったのに。

あの言葉の続きをだつて聞きたかったのに。

びひしてひやいけないとばかりなんだろう。

びひして私は、大好きな人の元へ送り出さなければいけない

ひと

いんだね。

「頑張ったね。」

ディーノには言いたくても絶対に言えない奥底の本音を、口に出さなくて済む。澤田くんは全部分かってくれてるみたいに、私を褒めてくれた。

まだ苦しいし、悲しいけど、でも、ディーノが私を好きだったと言つてくれたから、澤田くんが頑張ったねって褒めてくれたから、私はこの涙が乾く頃には笑えると思う。笑つて前に進めると思うんだ。だから、今はまだ、泣くことを許して欲しい。

「獄寺くん、ディーノのこと、もう少し詳しく教えて欲しいんだけど。」

「諦めたんじゃなかつたのかよ。」

獄寺くんの前に手製のエスプレッソを置き、私は彼の真正面に腰を下ろす。

私は今、穂月さんの喫茶店にいる。しばらくサボっていたせいでコーヒーを淹れる腕が大分落ちた私はただ今リハビリ中。獄寺くんはその実験台だ。本人には言わないけど。

「諦めるって言い方むかつくけど、ディーノのこととはまあ、完全にじゃないけどふつきたよ。でも、ちゃんと納得するために、知つておきたい。何で、ディーノの結婚が決まつたのか。」

真っ直ぐ獄寺くん見て言え、彼は少し困った顔をして、私から視線を反らした。

「つーか、何で俺に聞くんだよ。山本とかに聞きやあいいだろ？」

「

「だつて武説明下手じゃん。」

はっきり言つて武は説明に向かない。なんか効果音で説明しようとするとから全然わかんない。ていうか、武に説明されて理解できたこ

とつてあんましない。それに・・・。

「それにたぶん、武は私にこの件にはもう関わって欲しくないと思うから。」

「確かにな。」

「それで沢田くんはどうかと思つたけど、あの人嘘つけなさそうだし。これ以上、彼に負担をかけるのは申し訳ないから。」

武もだけど、沢田くんは私を彼等の世界には巻き込みたくないと思っていた。だけど、私がティーノを好きだつたから、忘れられないから、彼は私のために策を練つてくれた。沢田くんが色々な気をまわしてくれたおかげで私は彼等の世界がどんなものか未だ知らずにいられる。これ以上、気苦労をかけるわけにはいかない。

「それで了平さんに聞こいつかと思つたんだけど、あの人も説明できる人じゃないじゃん？で、雲雀さんはどうかと思つたんだけどあの人と仲良くないし、危険因子に自ら近づきたくないし、で、クロームちゃんはどうかと思つたんだけど巻き込むの可哀そうだし。それでしようがなく獄寺くんに説明してもらおうと思つて。」

「そんなんに俺が嫌いか。」

「まあまあ。で、説明して欲しいんだけど。」

もう一度今度は笑顔で頼めば、彼は再び大きなため息をついた。そして何かを考えるように目を閉じた。そして目を開けると同時にティーノの周りで起こつていたことを話してくれた。

「はね馬は大企業の社長な。多くの企業を従えるでかい会社の社長だ。んで、その会社と競うようにB社という会社が勢いを伸ばし始めた。まあはね馬の会社には大した影響はないかもしないがあんまし素行がいい会社じゃなくてな。そこでトップであるはね馬の会社が提携を組もうと提案した。するとB社は自分の娘を娶つてくれたら提携を組むと言つてきた。・・・何で、自分の娘を娶らせたいかわかるか？」

「えつと、自分の会社との繋がりをより強くするため？」

「そうだ。娘を娶らせることで他の会社以上に強固な関係が作れるからな。これから企業の安定を考えるならB社を潰すわけにはいかない。そして自分の下に着く奴らを守るためににはね馬に残された道はそれしかなかつた。一言で言つなら政略結婚だな。」

想像以上に、ディーノの周りでは大変なことが起きていたらしい。

「はね馬、最初は断つていたらしい。」

「え？」

「自分には決めた相手がいるから、他の条件にしてくれつて。色々、他の方法も考えたらしい。だ  
が・・・。」

「ありがと。」

「は？」

突然お礼を言つた私に訳がわからない、といった様子で獄寺くんが

瞬きしながらこちらを見ていた。呆けたその顔が珍しくて私は思わず笑ってしまった。

「ディーノが本当は迎えに行きたかったって言ってくれたんだ。それが嘘じゃないってわかつて嬉しかった。だから、ありがとう。」

「それでも、あいつが選んだのは仲間だ。」

「うん、それでいい。ディーノがどれだけ部下の人を大切に思っていたのか私は知ってる。だから、部下を守るっていう決断はディーノらしくて、良いと思う。」

「ちつ。お人好しな女だな。」

「獄寺くんだって十分お人好しでしょ。私の我儘に付き合ってくれてありがとう。エスプレッソのお代りいかが? 今度は穂月さんに淹れてもらうからおいしいよ。」

「・・・お前が淹れたのでいい。」

照れ臭いのか、獄寺くんは私の方を見ずに立ちあがっている私にカップを差し出してきた。ぶつちやけ獄寺くんは沢田くん至上主義過ぎてたまにうざいけど、悪い人ではないのだと思う。さすが沢田くんの友達なだけあってお人よしだ。

「んじゃ、また明日な、西崎。」

「うん。今日はありがとう。」

獄寺くんは私が淹れなおしたエスプレッソを飲み終わると帰つて行

つた。私は彼が出ていったのを見送ると新しいエスプレッソを淹れ、カウンターに座る一人のお客の元へと運んだ。

真っ黒なスーツに身を包んだ赤ん坊の元へ。

「私が無理矢理頼んだのだから獄寺君を責めないでよ。リボーン。」

「何も言わねえぞ。お前、あの説明じゃ俺達の世界がどんなに全然わからんねえだろ。」

「わからん。それに、知らない方がいいんでしょう？」

「お前の為をいうならな。」

そつとつてカップに口をつける。文句を言つてこない辺り、味は悪くないようだ。それを確認してから私はリボーンの隣に腰かけた。

「相変わらず客のいない店だな。人気ねえんだな。」

「その人気のない店を気に入つてるのは何処の誰だ、この野郎。」

「それはさておきだ。」

あ、無視しやがった。この赤ん坊、腹立つな。

「もう怒んな。」コーヒーの味は気に入つてゐるぞ。」

「あれ？私口に出してた？」

「俺は読心術が使えるからな。」

プライバシーの侵害だな。偉そうに語りリボーンに私は心の中で突っ込む。私はため息をつき、リボーンに視線を戻した。彼が何を言いいに今日ここへ来たのかなんとなくわかつている。

「忠告に来たんだよ。沢田くんたちに関することで。」

「聰い奴は嫌いじゃねえぞ。」

「どーも。」

「関わるな、とは言わねえ。だがな、距離を間違えるな。間違つても、ツナを好きになるなよ。」

「何で私が沢田くんを好きになるのよ。」

「千景。」

静かな低い声で名前を呼ばれ、私はビクッと肩を竦める。名前を呼ばれただけなのに、身が強張るほどどの威圧感を感じる。

「距離を間違えば、互いにつらくなるだけだ。ツナがお前を進んで巻き込もうとするとは思えねえが、まだ甘いからな。だからこそ、お前が距離を誤るな、千景。」

私が沢田くんを好きになるとか、そんなの想像も出来ないけど、リボーンの言葉は重くて、私は「ぐぐり、と唾を飲む。

「・・・つまり、これ以上踏み込むなってこと?」

「そういうことだ。一定の距離を保ち続ける。退くことがあっても踏み込むな。ツナを傷つけたくないならな。」

否定を許されない威圧感に私は頷くことしか出来なかつた。距離の取り方をどうすればいいのか正直わからなかつたけど、分かつたことがひとつ。私が距離を誤れば傷つく人がいるのだということ。

「わかつた。」

あの時、私はそう言ってリボーンの言葉を理解したつもりだったけど、たぶん何も分かつてなかつたんだ。距離を取るということがどうことなのか。自分がどれだけ危うい位置に立つっていたのか。何ひとつ、わかつていなかつた・・・。

### 1-1-1 新たな予感（後書き）

一応ここまで第一部完結です。ここまで読んでくださったのがどうぞありがとうございます。

次回から第一部が始まります。一部はヒロインの過去の恋の話だつたんですが、一部からは「これから恋の話です。ようしければ引き続き次回のお話もお楽しみください」。

## 2 - 1 羨望（前書き）

第一部のスタートです。

距離の取り方を間違えるな。そう言われた時にはもう、間違えていたのかもしれない。

「おはよー、西崎わん。昨日の宿題やつてきた?」

「おはよー、沢田くん。見せないよ。」

挨拶と共に冷ややかに断つた私に沢田くんは苦笑する。

半年前まで挨拶もろくに交わさなかつた私と沢田くんだが、今ではこうして会話らしい会話もするようになった。そして春。私たちは高校3年生になつた。とは言つても、2年から3年はクラス替えをせずに持ちあがるため、代わりばえはしないのだが。

「別に出来ない訳じやないんだから自分でやりなさい。」

「はーー。」

渋々ノートを取り出し、数学の宿題を始める沢田くんに苦笑しながら様子を見守る。いや、見張つて言つた方が正しいかな?ちなみにすぐに私に頼らうとするのがもう一歩いる。

「千景ーー!宿題見せてくれー!」

「お前も自分でやれー!」

教室に入つてきて早々宿題を見せると、机に向かって厳しく言い放つ。す

ると彼も渋々、と言つた様子で沢田くんの隣に座り2人で宿題を始める。3年になつてからというものこの光景が当たり前になつてしまつた。

「「出来ました。」」

「よひし。」

終わらせた2人の宿題を確認し、間違いがないかをチェックする。どうやら2人とも馬鹿ではないらしく、全問正解とはいかなかがなかなかの出来栄えだつた。最初つからやればいいのに。

「「」と「」が違うけど、まあこんだけ出来てれば大丈夫なんじゃない？」

「よかつた。」

「な。千景は厳しいからな。」

「感謝しろ?宿題のチェックしてやつてんだから感謝しろ?」

ノートで2人の頭を叩きながら言え、何ともいえぬ苦笑いが返つてきた。

「ちかちゃん、お疲れ様。」

「ありがとう、京子。」の2人には全く感謝の意志つてものがないんだよ。」

労いの言葉をくれる京子の頭を撫でれば彼女はくすぐつたそこに身

を掠りながら愛らしい笑顔で笑つた。本当に可愛いな、この子。・  
・ そういえば、京子は沢田くんが好きなんだつけ。ふと、そんなこ  
とを思つて私は何やらノートと睨めつこ始めた沢田くんと京子を  
見比べた。2人が並んだら、愛らしいカップルなんだねつ。

「西崎さん、このうだつた？」

「ん？ ああ、やつ。なんだ、やれば出来るじゃない。」

どうやら先ほど間違えた場所を解き直していたらし。しかもちや  
んと解けてるし。

「こつもこれなら成績も上がるだりつ。」

「それじゃあ俺がいつも怠けているみたいに聞こえるんだけど。」

「え、違うの？」

「本氣で不思議そうに聞かないで！？」

「ツナ、いじられてんな～。」

「日本、なんか楽しんでない？」

突つ込み連発の沢田くんを私は笑つて流す。若干不貞腐れ気味  
の沢田くんだったけど最終的には笑つていた。

「ちかちやん。」

「ん？」

「あの、今日の放課後空いてるかな？聞いて欲しいことがあるの。」

名前を呼ばれ振り返ればどこか不安げな様子で京子が私を見ていた。

「今日はバイトがあるんだ。」

「せつか。」

見るからにしょげる京子になんだかものすじく申し訳なくなつてきて、私は考えた末、口を開く。

「バイトまでの間でよければ空いてるけど。いい？」

「うう。」

花が咲いたように微笑む京子に短い時間でもあげられてよかつた、と思いまつと息をつく。

「それで話つて？」

穂円さんのカフュまで京子を連れてきた私は彼女に紅茶を出し、彼女の向かい側に腰掛けた。そういえば、沢田くんの不思議さを知ったのも、ディーノに再会したのも、リボーンに忠告を受けたのもここだつたつ。さて、今日は何があるのやら。話を聞く前の私は懐かしさに現を抜かしていたのだ。

「シナくんのことなの。」

「沢田くん？」

「わ、私、ツナくんのことが好き。」

顔を真っ赤にして言つ京子はとても迷らしくて、女の子だと思つた。その表情を見ると、ディーノを好きだつた自分を思い出す。恋に必死だつた自分は今はもう、遠くに感じじる。

「私が沢田くんと最近仲良くなつだしたのが気になる?」

「え、えっと……うん。」

あまりにも素直で愛らしい彼女に私は思わず笑つてしまつ。本当に沢田くんが好きなのだとわかつた。

「実はね、私の好きだつた人沢田くんが知り合いで、その人との恋を終わらせるのに協力してもらつたの。それで少し仲良くなつただけ。」

彼のおかげでディーノのことに関しては自分でもびっくりするくらいすつきりとしている。昔を思い出して心が温かくなることはあっても泣きそうになることはない。

「感謝はしてるけど、恋愛感情はないよ。だから頑張れ、京子。」

「ありがとう、ちかちやん。」

ほつとしたように笑つて京子は帰つて行つた。

「恋する乙女はかわいいねえ。」

「親父みたいだぞ、千景。」

「……」

びっくりして振り返るとリボーンがカウンター席でエスプレッソを飲んでいた。何でここにいるのかしら。

「暇なの? リボーン。」

「お前、そんな接客態度だから客が減るんだぞ。」

「あたしが客減らしてるとみたいに言い方やめてくれる?」

リボーンの言葉にイライラとしながらもふと浮かんだ疑問をそのまま彼に尋ねてみる。

「京子が沢田くんを好きになるのはいつの?」

「ああ。京子は全部知ってるからな。」

「それって、沢田くんの秘密の?」

「やうだぞ。」

「やつか。」

つまり、京子は私の知らない沢田くんのことを知ってるんだ。その

「ついでリボーンからも関わることをよしおねてるわけだ。

羨ましいな。

・・・羨ましい? 何で?

「千景。」

自分の思考にフリーズしているとリボーンに名前を呼ばれた。その表情は厳しい。でも、何故そんな顔をして名前を呼ばれたのかわからなくて、私は首を傾げる。

「お前・・・。」

「千景ー・もつ仕事の時間だよー。」

「あ、「」めんなさーー「」めん、リボーン。」

穂円さんの怒声に私は慌てて店の奥に入った。

今思えば、あの時の私の変化にリボーンは気付いていたのかもしれない。

## 2・2別れ道

京子に気持ちを打ち明けられた時、私の存在がどれだけ彼女に不安を与えていたのかと言つことがわかつた。改めて、沢田くんとの距離の取り方を見直すべきだと思つた。

・・・はずなのに。

「助かったよ。俺だけじゃ鍋の材料何にしていいのかわからなかつたからさ。」

「どう、いたしまして。」

何故か私は、休日に沢田くんとスーパーで買い物をしていた。

遡ること15分ほど前。親から買い物に行けと言われてスーパーに来たら、野菜コーナーで何やら悩んでいる様子のススキ色の髪の少年を見つけてしまったのだ。

「鍋つて何入れるんだろ。トマト鍋つてあるし、トマト入れていのかな?あれ?トマト鍋つて何入つてんだろ。ピーマン?」

「何でピーマンチョイスしたの!?」

「あれ?西崎さん。」

「あ・・・。」

とまあ、思わず突っ込んだじゃつたら何故か鍋の材料の買出しに付き合わされたわけだ。まさか沢田くんに突っ込む日がくるとは思わなかつたな。だつて沢田くんつて突っ込みでしょ？何であたしに突っ込まれてんの？なんだかどつと疲れてしまつて、私は沢田くんに気付かれないようにこいつそりため息をついた。

「西崎さんの家は今日は何食べるの？」

「うちはハンバーグ。」

「俺の家は今日獄寺くんや山本を誘つて鍋パーティなんだ。」

「いいね。」

嬉しそうに言つ沢田くんを見ていたらなんだか自分の中にあつたもやもやした気持ちが晴れていくよつだつた。こいつの時、沢田くんは不思議な人だなつて改めて思つ。

「沢田くんつて肉ばつかり食べて野菜食べなさそだよね。」

「食べるよーそんなに子どもじゃないからー。」

「あはは。」

「信用してないでしょー！？」

沢田くんとの「うひうひ会話はす」く好きだ。よくわからないけど、すく安心する。沢田くんは不思議な人。笑つてくれるとほつとするし、傍にいると安心する。何で獄寺くんや武が君を大事に思うのか、何で、京子が君に惹かれたのか。今なら、なんとなくわかる気

がする。

「ありがと、沢田くん。」

「何が？」

「ディーノのこと。沢田くんがいたからディーノに会って話ができたし、一杯泣いてすつきり出来た。だから、ありがとう。」

沢田くんにはたくさんお礼を言わなくちゃいけない。リボーンの話だと、ディーノは沢田くんに会いにちょくちょく日本を訪れていたらしい。つまり沢田くんがいたから私はディーノに会うことができたのだ。そして、沢田くんがいたから私はディーノに会ったことを後悔しなくて済んだ。

「ありがと。」

ディーノに出会わせて貰って、後悔なく、別れをさせて貰って。・・・  
ありがと。」

私の突然のお礼を沢田くんは瞬きもせずにじっと聞いていた。

「・・・、沢田くん。」

「ん？」

「沢田くんは手放さないでね。」

唐突な私の言葉に沢田くんは不思議そうに目を瞬いた。私は握る拳に力を入れ、声が震えないように気をつけながら言葉をつむいだ。

「大切な人が出来たら、放さないあげて。置いて行つたりしないで。」

京子を、置いて行かないあげて。そんな気持ちを込めて言つた言葉に沢田くんは目を見張つて聞いていた。

「変なこと言つて」めんね。じゃあ、また月曜日に。

「・・・うん。またね。」

別れ道に来て、私は沢田くんに手を振つた。沢田くんも笑つて手を振つてくれた。互いに互いの道を進んでいく。交わることのないこの道は私と沢田くんのようだと思つた。

ねえ、沢田くん。私は少し、怖くなつた。君の隣にい続けたら、私の心は変わつてしまふ気がして。リボーンの忠告が私の頭に鳴り響く。距離を間違えるな、と。

私が気付かなかつただけで心は静かに、緩やかに変化していたんだ。それは自覚するとともに急速に形を変える。形を変えた想いは名前を持つ。

朝から降り続く雨は私を憂鬱にする。そもそも今日は調子が悪いのだ。頭ガンガンするし。だといつのにこの空模様。気分が沈む理由はそれだけで十分だ。

「ちょっと千景。めっちゃ眉間に皺寄ってるんだけど。」

「いつも通りですけど。」

「どんないつも通りだ。」

花に呆れたようにため息をつかれる。眉間に皺を寄せている気なんてなかつたのだが頭が痛いせい自然と寄つていたらしい。

「朝から頭痛いの。あー、だめだ。やっぱ保健室行つてくる。」

席を立つと頭がクラッとして一瞬視界が歪んだ。

「ちょ、ちょっと大丈夫？」

ふらついた私に花が心配そうに声をかける。大丈夫、と伝えて私は教室を出た。偏頭痛というものだらう。雨の日は大抵頭が痛くなるし。少し寝れば大分よくなるはずだ。私はふらつきながら保健室まで向かつた。そしてふと気付く。

「あの変態保健医がいたら面倒くさいな。」

鈍い痛みを訴える頭を抱え、あの変態保健医ことシャマル先生を思い浮かべる。絶対何かしら絡んでくるはずだ。想像すると余計に頭が痛くなってきて、私は深々とため息をついた。意を決して保健室の扉を開くと予想に反して静かな保健室が私を出迎えてくれた。よく見れば扉に張り紙がしてあった。

『恋のハンティングに行ってくるぜ。』

それでいいのか、保健医！

心の中で突っ込みながらも、まあいいにこしたことはないと安堵の息を吐く。

「失礼します。」

誰もいないけど一応挨拶をしてから入室した。上履きを脱いでベッドに上がり込む。頭が痛いせいか眠気はすぐにやってきた。

夢と現を彷徨い始めた頃、ゴロゴロ、という地を這つよつな音に私は目を覚ましてしまった。

止せばいいのに布団から出て、カーテンを開け、窓を見る。瞬間、窓から見える景色が青白く光り、再び地を這つよつなあの恐ろしい音が聞こえてきた。雷が鳴つていると理解するよりも早く、私はカーテンを閉め、頭まですっぽりと布団を被つた。

光も音も通さぬよつに目を瞑り、耳を塞いだ。カーテンを閉め、窓

から背を向けているおかげで光は見えないが音だけはどうしても聞こえてきてしまう。音が鳴るたびに震えながら私は必死に眠ろうとした。しかし緊張状態のせいかさつきまであつた眠気が何処かに行ってしまったたらしい。私は声を押し殺して布団の中で震えているしかなかつた。

ぽんぽん。

突然、布団の上から誰かに優しく体を叩かれた。まるで子どもを寝かしつけるようにぽんぽん、と優しく。恐る恐る顔を出すとそこには優しい表情で私を見ている沢田くんがいた。

一瞬、周りの音が消えた。ざわり、心の騒ぐ音だけが聞こえる。

「な、んで、ここに？」

「黒川が、西崎さんが保健室に行つたって聞いたから様子を見に来たんだ。」

「そ、う。」

会話を始めると同時に私の世界に音が戻ってきて、雷の音に私はビクリ、と体を震わせる。

「雷、怖いの？」

「…………うん。」

弱さを見せるようで肯定することに戸惑つたけど、雷が鳴るたびにこつして体を震わせているのだ。誤魔化したところで強がりだと見

抜かれることは間違いない。悩んだ結果、私は肯定した。複雑な私の心境を知つてか知らずか、沢田くんは先ほどよりも優しい表情で笑つた。

また、ざわり、と心が騒ぐ。

「わうだ。ちょっとといい？」

「え？」

沢田くんは私の枕元に座つたかと思つと腕を引き、私を抱き寄せた。

「…？」

「うすれば、俺の心音しか聞こえないでしょ？」

トクン、トクン、と心地よい音が耳元で鳴つてゐる。私がこくり、と頷けば沢田くんは寒くないよつと布団で私をくるんだ。

「わのチビ達が、やっぱ雷歎手で。うしてやると安心するらしにんだ。」

「私はそのお手ビヤんたちと一緒につてわけね。」

「あはは。」

沢田くんの足の間に座られ、抱き寄せられているこの状況はかなり恥ずかしくてドキドキするけど、それと同時に安心もする。乾いた笑みを浮かべる沢田くんに苦笑しながらも胸に耳を当て、彼の心音を聞く。不思議ともう、雷は怖くなかった。そのおかげか、再び

眠気がやつてきた。

「いいよ、寝ても。眠るまでこつしてるから。」

暖かい手が頭を撫でてくれる感覺に酔いしれながら、私は目を閉じた。あんなに怖かったのに今はただ安らかだ。

いつからだらう、この手をディーノと重ねなくなつたのは。

私は当初、沢田くんにディーノの姿を重ねていた。明るい笑顔、人を惹きつける不思議な魅力、時折見せる大人びた表情・・・。その全てがディーノに似ていて、私は沢田くんに彼を重ねてみていた。だから彼に対し感じた感情はディーノに向けた私の想いだつた。

でも、いつからか、沢田くんの笑顔に、大人びた表情に、優しい笑みに、ディーノが重なることはなくなつた。

私は沢田くんを沢田綱吉という一人の存在として見ていた。

まどろむ意識の中では何度もどうしてかと自分に尋ね続けた。そして、意識が途切れる直前、理解する。

私は、沢田くんが好きなんだ。

想いは自覚するとともに急速に形を変え、そして明確なものになつた。

互いの道が交わることはないと知つてゐるはずなのに。どうして、好きになつてしまつたんだら？

目が覚めた時、私は布団の中で横になつて眠つていた。沢田くんが傍にいたなんて嘘みたいだ。でも、確かに彼はここにいて、私は彼の腕の中、心音を聞きながら、眠りに落ちたのだ。沢田くんを好きだと自覚して。

ぐつすり眠つたおかげか、頭痛は消えていた。布団から出で、大きく伸びをする。雨音がしないということは雨も止み、雷もおさまつたのだろう。ほつと息をつき、私は教室に戻る。

「おかえり、千景。うん、顔色よくなつたね。」

「心配おかげしました。」

わざとおどけた様にして言えれば、全く、と花に呆れられた。授業が始まるとまで花や京子たちと他愛もない話をして笑つた。だけど、私の視線は時折、沢田くんの方へ向いていた。どうすることもできないうの想いを、私はどうやって消化すればいいんだら？

放課後、すぐに帰る気にはなれなかつた私は教室の窓から夕日の沈む景色を眺めていた。

「帰らねえのか？」

「武……。」

振り返った先にいたのは野球のユニホームを着た武だった。まだ、部活中のはずなのだが。

「さほり？ 珍しいね。」

「千景に話があつたからな。」

「・・・・・」

武に改めてされる話が思いつかず、私は首を傾げる。そんな私に困ったように笑い、武は私に歩み寄ると真剣な表情で口を開いた。

「ツナを、好きになるなよ。」

「・・・・・」

ドクン、と心臓が大きく鼓動を刻む。動搖を悟られぬように瞳は真っ直ぐ武を見据えた。

「リボーンと同じことを言つんだね。武も忠告に来たつてわけだ。」

今思えば、リボーンはこうなることを分かっていたのかもしれない。私は、距離を間違えたのだろうか。

だから、沢田くんを好きになってしまったのだろうか。

「一回言われてんならこれは警告だ。・・・好きになつてもお前がつらいだけだ。」

“好きになるな。ツナを傷つけたくないならな。”

「……私が沢田くんを好きになつたら沢田くんを傷つけるのかな？」

「千景？」

視線を外し、現実味のない声で話す私を武が訝しげに呼ぶ。  
「傷つけてしまつ？」

優しい人の人を傷つけてしまつ？

「・・・ああ。」

じゃあ、私の想いは知られちゃいけないね。

「千景、お前・・・。」

「ねえ、武。背中、貸して。」

私の言葉に、武は無言で背を向けた。その背に顔をうずめる。私の想いが誰かを傷つけるのならこんな想い失くしてしまえばいい。奥底にしまって、出てこなければいい。

ほろり、と私の瞳から涙が零れた。

距離を置くのは至極簡単なことだった。それは私と彼との関係の希薄さを表しているようだ、とても寂しい。

「おはよー、千景。今日もぎりぎりだね。」

「早く来ることより睡眠を選びました。」

私は私に沢田くんとの距離を置くと決めたあの日から登校する時間を変えた。遅く来れば、以前のように沢田くんに勉強を教えることはない。それに私がいなければ京子が教えるだろうし、沢田くんと京子の距離を縮めるなら一石二鳥だ。

10分休みや昼休みは京子や花、美砂緒と共に女子話に話を咲かせていた。放課後のバイトもコーヒーの練習を理由にあまりカウンターで無駄話をしないようにした。別に沢田くんを避けるつもりはないので話しかけられれば話すし、挨拶もある。

ただし、接点を減らしただけだ。

それだけでも随分と沢田くんは遠くの人になってしまった。こうしてみると、私がどれだけ自分から沢田くんに関わりに行っていたのかがわかる。自分がどれだけ、沢田くんと希薄な関係にあったのかがわかる。クラスメイトよりは親しいかもしない。でも、友達と呼べるほどの絆で結ばれている訳でもない。ただ、クラスが一緒に好きだった人が沢田くんの知り合いだったというだけのことだ。

「しけた面してゐるな、千景。」

「「つむれこ、リボーン。」

エスプレッソを運びに行つて言われた言葉にイラッとしながらも努めて冷静な声で返す。そんな私の態度に何が楽しいのかリボーンはニヤリ、と笑みを浮かべる。

「だからいつたじやねえか、距離を間違えるなつて。」

まるで私の気持ちを見透かしているかのようなリボーンの物言いに、ぎりつと奥歯を噛みしめる。これ以上、この赤ん坊と話したくなくて、私は背を向けた。

カラソコロン。

店の扉が開く音がして、私はそちらに顔を向ける。

「・・・いらっしゃいませ。」

黒いスーツを着た沢田くんだった。私の姿を見ると少し困つたように笑つた。

沢田くんは仕事で来る田はいつもどこか気まずそうに困つたように笑う。それを寂しいと感じるのはおかしいだろつか。

沢田くんとリボーンが4人掛けの席に座つて間もなく、相手方の人々が2人やってきた。こちらもやはりスーツ姿。見るからに怖そうな人たちばかり。彼等と沢田くんにどんな関わりがあるのか、私には想像もつかない。

「お待たせいたしました、コーヒーです。」

「コーヒーを届けに行くと、沢田くんとリボーンの姿がなかつた。どこに行つたんだろう、と思いながら2人の男の前にコーヒーを置く。

「何だ、このコーヒー。味がねえぞ。」

一口飲んだ奥の男が顔を歪めて言つた。でも穂円さんが作ったコーヒーに限つてそんなはずはない。それでも客がそう言つていいのだから謝らなければいけない。

「申し訳ありません。お取り換えします。」

奥の「コーヒー」を取ろうと伸ばした腕を手前の男に掴まれた。

「おー、ねえちゃん。取り換えるだけで済むと想つてんのかよ。こんな不味い「コーヒー」普通に出しやがつて。出すもん出してもらひやうか。」

「痛つー！」

手首を捻じり上げられ、私は顔を歪める。コーヒーが不味いなんて絶対嘘だ。時折こうしていちゃもんをつけてくる客がいるのだ。

「離してくださいーーーだいたい、本当に不味いんですか？」「このコーヒーはリボーンだって認めてるんですよーーー！」

「ああ？客の言ひ方どが嘘だつて言つてえのか？」

「違つのか？」

「「...」」

いつの間にか帰つてきて向かい側の席に座つてゐるリボーンに私も男も驚いてそちらを見る。無表情に男を見るリボーンは正直怖い。

「その手を離してください。」

男の腕に男性にしては少し細めの腕が伸び、つかんだ。顔を上げれば、普段は優しい笑みを浮かべている沢田くんが無表情で立つっていた。

「離せ。」

沢田くんが掴んでいる手に力を入れると、男からうめき声が上がり、私の手首から手が離れた。男を冷ややかに見ていた沢田くんの瞳が労わるような色に変わり、私を見た。

「大丈夫？」

そつと手を取られ、立ち上がる様促される。掴まれた手首が赤くなつてゐる。結構強い力で掴まれていたらしい。それを見た沢田くんは眉間に皺を寄せ、私に背を向け、男に向き直つた。

「一般人に手を出すな。」

思わず、田の前の沢田くんから顔を背けた。首を絞められているみたいに息苦しい。

「交渉し直しだな。おい、ツナ。俺は千景を手当してしてくれるから取引終わらせておけよ。」

「わかった。」

「行くぞ、千景。」

先を歩くリボーンに私は無言でついて行つた。奥にいた穂用さんで事情を説明し、私はリボーンとスタッフフルームの中に入った。

「何、沈んだ顔してんだ。」

「・・・別に。」

「千景。」

幾分厳しめな声で名前を呼ばれ、顔をあげる。情けない顔をしているのだろう。リボーンは少し驚いた顔で私を見ていた。

「私がわざわざ距離を取らなくとも、沢田くんと私には決定的な距離があるじゃない。」

私の知らない沢田くんの秘密。それがある限り私と沢田くんの距離は縮まらない。いや、知ったところだと縮まない。だつて・・・。

「沢田くんは私との間に線引きをしてる。」

私を一般人と呼んだ。友達でも、クラスメイトでもなく、一般人と。沢田くんと私を別のものだと線引きをした。

それは秘密を知つても知らなくてもきっと変わらない現実。

## 2・6 消したい想い

私は一度と、想つだけの恋なんてしない。実ることがないのなら、その恋は諦める。するいかもしない。でも、立ち止まらないためにも無理矢理にでも前に進むしかないのだ。

「ちが、最近合コンに行つてるつて本当?」

昼休みの屋上。久しぶりに美砂緒と2人でお昼を食べている。

「行つてるよ。いい出会いがあればいいと思つて。」

何でもないことのように答えれば美砂緒は訝しげな顔で私をじつと見てきた。中学からずっと一緒にいる美砂緒には私の今の行動は不可解でしうがないのだろう。

「自暴自棄に見える?」

「・・・うん。」

言いはずらそうに頷く美砂緒に私は苦笑する。らしくない行動は随分この友人に心配をかけてしまつたらしく。

「そうだね、自暴自棄気味かも。」

自嘲気味な笑いがこぼれる。ここしばらく花に誘われるがまま、合コンに参加した。でも、いい出会いなどあるわけもなく、私は営業スマイルを振りまい疲れて帰るのだ。それでも少しでも沢田くんの事を忘れられるなら、あの悲しい気持ちを忘れられるなら、それ

でよかつたから。

「もし気分転換で合コンに行くなら、やめよつ？それよつもせ、私と遊ぼうよーねー。」

京子とはまた違ひ愛らしく笑顔に私の頬も自然と緩む。

「ありがとう。」

合コンに行くか行かないかは別として、美砂緒の気持ちは嬉しかった。

結局、その日も花に連れられて合コンに行つた。そして見覚えのある顔があつて、私は田を反らした。今日の合コン相手は黒曜高校だったらしい。

そう、何故か骸さんがいたのだ。

骸さんに会つたのはティーノの婚約パーティーで一度だけ。独特的の雰囲気と髪型だったので覚えている。絶対にしつこい所にくるタイプじゃないのに。

「は、花、私、今日はもう帰つてもいいかな？」

「は？ 来たばっかりじゃん。」

「えつと、あれだ！ 頭が痛くなつてきたのー。うん。てことど、じゃあねー！」

「ちよつと、千景ー！」

花の制止も聞かず、私は挨拶もそこそこに鞄を持って店を飛び出した。

「びっくりした～。何でのパイナップルがいるのよ。」

「誰がパイナップルですか。」

「…。」

振り返ると骸さんが笑顔で立っていました。

「…こんばんは、骸さん。」

「こんばんは、お姫様。」

冷や汗をだらだらと流しながら、私は骸さんに捕獲された。

「あの～、骸さんは何であんな所にいたんですか？」

「おや、可笑しいですか？」

「物凄く。」

即答すれば、骸さんは楽しそうにクツツツツ、と奇妙な笑い声を上げて笑った。絶対変だよ、この人。ていうか、怖いよ、この人。

「僕はたまたま君が参加すると聞いたので参加しただけですよ。」

「何で？」

「ボンバーのお姫様に何かあつたり困りますからね。」

よくわからない理由に私が首を傾げると、君はまだ知らないていい、と穏やかな笑顔で言われた。そんな顔も出来るのか、とじばしその笑顔に見惚れる。

「骸さんはそやつて笑うとすげく素敵ですね。」

私の言葉にじばらく呆けた顔をした後、骸さんは噴き出すように笑つた。

「何で笑うんですか～！？」

結構いいことを言つたと思つただけに笑われると変なことを言つてしまつたのかと若干焦る。そんな私に彼はいえいえ、と首を振つた。

「お褒めに預かり光栄ですよ。」

芝居がかつた口調に私は少々不貞腐れる。なんだか遊ばれてるみたいだ。そういうのは沢田くんの役割なの!。。。。何ですぐ沢田くんに繋げちゃうのかな。自然とため息が零れる。

「どうしました? 沢田綱吉と何かあつたんですか?」

「。。。何も。どうせ私は部外者ですか。」

拗ねたような口調に自分でも呆れてしまう。拗ねるような事じゃない。沢田くんはきっと私を巻き込まないために線引きをしただけだから、拗ねることじゃない。

「知りたいですか？沢田綱吉の秘密を。」

「……知りたいです。でも、知つても何も変わらないと思つから、知らなくていいです。」

そう、何も変わらない。いや、知つてしまつた方が彼は遠ざかってしまうのかもしない。だつて……。  
「だつて、知つたとしても沢田くんは私を置いて行つてしまつと思つから。」

一瞬驚いた顔をした骸さんはさつきと同じ穏やかな笑みを浮かべた。

「置いて行かれるのは、嫌ですか？」

「……はい。」

置いて行かれるのは、もう嫌だ。ディーノの時のように待ち続けるのはもう嫌だ。あんなに寂しくて、苦しい思いをするのはもう嫌だ。だつて、結ばれないという結末を私は知つているから。今度はもう、待てないと思う。

待つのは、もう嫌だ。

置いて行かれるのは、もう嫌だ。

俯いた私の頭を撫でる骸さんの手は思つていたよりもずっと、暖かかった。

一人で帰れると言つた私を骸さんは送ると言つてついてきた。骸さんといふとまるで自分が子どもみたいでちょっと悔しくなる。骸さんに気付かれないようにこつそりため息をつくと、前方に人影が現れた。ていうか、沢田君だし。ていうか、沢田くんの家の前だし。

「あれ？ 西崎さん……ヒ、骸？」

「やあ、じんばんは。沢田綱吉。」

「……じんばんは、沢田くん。」

「ひつひり、沢田くんに笑顔で挨拶して私は勢いよく骸さんの制服の袖を引っ張つた。降りてきた骸さんの耳に小声で訴える。

「ちよっと、何で沢田くんと遭遇してんのよー絶対わざとこじこに来るようひに誘導してきたでしょ、あんた！」

「何のことですか？ 僕は君にひいてきただけですよ。」

胡散臭い笑みを浮かべる骸さんに本気で殺意が芽生えた。頭撫でてくれた時のあの優しさは何処にいったんだ、このパイナッフルめ！

「何で骸が西崎さんと一緒にいるんだよ。」

合コンで会いました。なんて口が裂けても言えない。仮にも好きな人に合コンに行っていたなんて知られたくない。

「たまたまですよ。たまたま。」

骸さんの曖昧な答えに沢田くんは眉を寄せたけど、それ以上は追及しなかった。たぶん、骸さんがそれ以上は説明しないと分かったんだろ。

「にしても一度いい所で会いましたね。千景のことは沢田綱吉に任せるとしようか。僕は用事があるんでね。」

私と沢田くんの返事も聞かずに骸さんは踵を返して帰つて行つた。丁度いいも何も、人が上の空なのをいいことにお前がここまで連れてきたんだよ！骸さんの背中に向かつて心の中で罵倒し続けた。

「何で、あいつまで……。」

「え？」

「いや、何でもない。あ、送るよ。」

「ひひでしょ、と言つて歩き出す沢田くんに私は一瞬何を言われたのかわからず呆けていたが、すぐに我に返り、彼の背中を追いかけた。

「い、い、よ！ だつて沢田くん、用事があつて家を出てきたんでしょ？ 私なら一人で帰れるからー。」

「コンビニに行こうと思つただけだから。それに、西崎さんといつして話すのは久しぶりだし。」

「……ありがとう。」

お願ひだから、そんな笑顔でそんなこと言わないで欲しい。沢田くんにとつては何でもないであろうその言葉にも私の心は高鳴つてしまつて、素つ氣ないお礼しか言えなかつた。

「あの日はごめんね。」

「え？」

「俺の仕事相手に絡まれた日。怖かつたでしょ？」

「・・・ああ。大丈夫だよ。今までにも何度かあつたもの。腕捕まれたのは初めてだつたけど。」

それよりも、沢田くんに線引きされたことのほうがずっと悲しくて、つらかつた。踏み込んだら全部失くしてしまいそうで怖かつた。

「ごめん。」

「沢田くんが謝る」とじやないよ。」

「でも・・・。」

「沢田くんの知り合いだろうが、仕事相手だろうが、ああいう行動を起こしたのはあの人たちなんだから沢田くんが謝ることじやないよ。人のしたこと今まで责任感じる必要はないよ。それに、沢田くんは助けてくれたじゃない。」

戸惑いの表情を浮かべる沢田くんに私は苦笑する。この人はどれだけ優しいのだろう。被害を受けた私が気にするなと言つているのだ。

だから気にする必要なんて、責任を感じる必要なんてないの!」。

「ばかだな、沢田くん。そんな顔されたお礼言つのが戸惑われちゃうよ。」

「俺、そんなに変な顔してた?」

「うん、とつても。」

真顔で大きく頷けば、沢田くんは苦笑した。まだ少し元気がないけど、いつもの沢田くんの笑みだ。

「助けてくれてありがとう、沢田くん。」

「どういたしました。」

少し照れた様子で私のお礼を受け止める沢田くんに自然、私の頬も緩む。必死に遠ざけようとしていたのに、遠ざかっていたのに。久しぶりに話す沢田くんとの会話はとても楽しくて、笑う沢田くんを見るのは幸せだった。たとえこれが今だけであっても、いや、今だけだからこそ、この幸せな時を心に刻みつけたい。

私のことなんて放つておいてくれればいいのに。どうして、放つておいてくれないの。

「何で、お前がここにいるんだぴょん！」

「犬、煩い。」

まつたりティータイムを楽しむ中、騒がしい声が部屋に響く。  
「」は黒曜ランド。骸さんのねぐらの様な場所だ。

そこにはクロームもいて、あと犬と千種つて人とも知り合った。犬は語尾に「ぴょん」を付ける変人で、千種は「面倒くさい」が口癖。変人つて言つたら怒られそうだから心の中だけにとどめておこう。

「何でつて、遊びにきたんだよ。」

最近此処へ来ることが日課となりつつある私は犬につこり微笑んだ。その笑顔が気に入らなかつたのか犬は余計に騒ぎだした。

「ボンゴレの人間がここにくんな！」

「・・・。」

だから、ボンゴレつてなんだよ、と心で突つ込みつつ口には出さない。何度か聞いたことのある「ボンゴレ」という言葉。たぶん沢田

くんに関連しているのだと思つ。沢田くんに関連しているのならば、私には関係ないと思つ。

「犬、千景は違うよ。」

「つむへーーお前は出しゃばるんじゃねえぴょん!」

クロームに向かつて暴言を吐いた犬に私は持つていたカツプを投げつけた。カツプは犬の頬スレスレを通り、奥の壁に当たつて砕けた。

「ダメでしょ、犬。女の子に暴言吐いちゃ。」

「す、すいません。」

「大人しくじつちで座つてなさい。」

につじり笑つて言えば、犬は素直に私の隣に腰を下ろした。

「じめんね、クローム。またカツプ割つちやつた。」

「気にしないで。」

「謝るなら最初から投げないで欲しいんだけど。」

千種の冷静な突つ込みに私は頬を膨らませる。彼等といるのはとても楽しい。並高のみんなとの会話の中には必ず沢田くんが出てくるけど、ここではあまり話題に上がることはない。だから楽しかったし、安らいだ。

「楽しそうな所申し訳ないですがね、千景。お迎えですよ。」

「え？」

やつと顔を出したと思つたら骸さんは後ろに沢田くんを連れていた。状況が理解できず私は田を瞬かせる。何で、沢田くんがいるの？そんな意味を込めて骸さんを見上げると、彼は少し困ったように笑つた。いつも人を小馬鹿にした態度をとる骸さんにしては珍しい反応に私は余計に戸惑つ。

「帰るよ、西崎さん。」

「え？」

腕を引っ張られ、私はクロームたちにうくな挨拶も出来ないまま黒曜ランドをあとにするこになつてしまつた。そんなことよりも、なんだか沢田くん。。。

「・・・怒つてる？」

ぴたり。沢田くんの足が止まつた。掴まれた手はそのままに、沢田くんが二つ折りを振り返る。眉間に皺を寄せ、厳しい顔つきで私を見る。その瞳の冷たさに私はびくり、と身を縮ませた。

「何で、黒曜ランドになんて行つてるの？」

「たの、しいから・・・。」

そんな答えでいいのかわからなければ、私は緊張しながらもう言葉を紡いだ。

「あそこは結構危ない場所だって知ってるよね?」

沢田くんの言葉に私は「く、と頷く。黒曜ランドは不良のたまり場として有名だ。今は骸さんたちがあそこを使っているからそういう危なくはないらしいのだが、それでも安全とは言えない場所だ。

「それに、何で骸に会いに行くの?」

「どうして? 骸さん、いい人だよ。」

「骸がいい人っていつのは語弊があると思つよ。」

「何で、そんなこと言つの?」

「どうして冷たい瞳で、声で、そんなことを言つの。どうして、私の知らない顔をするの。」

「巻き込まれたらどうするつもつ?」

「巻き込まれる? 何に? わからない。」

「お願いだから、もう骸に会いに行くのはやめてよ。」

「何にも教えてくれないくせに、何でそんなこと言つの?」

「やだよ。折角仲良くなつたんだもん。これからも行く。」

「西崎さん!」

「何でダメなの!? 私が何処で何をしようが沢田くんには関係ない

じゃない！」

「関係なくないよー危ないと分かってるのに、友達を行かせる説にはいかないだろー！」

声を張り上げれば、沢田くんはそれ以上の声で返してきた。彼は私を友達だと叫び。

何も知らない私は友達？君に一般人と線引きされた私は友達と言えるの？

「どうして、放つておいてくれないの・・・？」

呟くような小さな言葉。沢田くんにはもしかしたら聞こえていないかもしね。田頭が熱くなつて、泣きそうだ。

「私の事は放つておいてよ！必死なの！忘れるために、前に進むために必死なの！それにはあの場所が一番心地いいのよー！」

沢田くんの傍にいると心が苦しいと悲鳴を上げる。優しさに触れる度、笑いかけられる度、それが私だけに向けられたものではないと知ると悲しくて、悲しくて、頭がおかしくなりそう。だからもう、放つておいて欲しい。

「友達だって言つなら、そう振舞うよつにするからーだからもう放つておいてよー！」

硬直する沢田くんの手を振り払い、私は駆けだした。息が切れて苦しくても、止まらずに走った。そのうち、足がもつれて私は派手に転んだ。起き上った時初めて、頬に温かいものが伝っていることに

気がついた。どうやら私は泣いているらしい。

何で？何かが悲しかったのだろうか。わからない。

ああ、でも、そうだ。悲しいのかもしれない。だって、胸がこんなにも痛い。

沢田くんと言ひ争いになつてから、私はずっと沢田くんを避けている。なのに、彼が話しかけようとするから段々と形振り構つていられなくなつて、沢田くんが近づきそうな気配を感じたら教室から逃げ出すなどあからさまな態度をとるようになつていた。

「千景、ツナと何かあつたのか？」

珍しく家に遊びに来た武は首を傾げて尋ねてきた。沢田くんの話などしたくない私は顔を顰める。

「別に何もない。沢田くんと関わらない方が武だつて嬉しいでしょ。」

拗ねた子どものように顔を背ける私に武の苦笑する声が聞こえてきた。その声はまるで、何をそんなに頑なになつてているのか、と言われているような気がした。

頑なに、なつているのだろうか。

これ以上好きにならないように、これ以上自分を傷つけないように、頑なに沢田くんを拒んでいるのだろうか。これが正しい距離なのだろうか。どれだけ頭で考えても答えが見つからなくて、私はため息をついた。

「ツナも、最近ため息が多いんだ。」

「・・・そう。」

そりや、友達だと思つてた人からこんなにあからさまな拒絕を受ければ誰だってへこむよね。でも、今の私にはどうもなー。

「俺はさ、莫迦だからよくわかんねえけど、今の状態が苦しいなら、苦しくなる方法を探せばいいと思つぜ。」

「何それ。」

苦じてから沢田くんを避けているんじゃないか。

「……じゃあどうして、今も苦じままなのだらう。」

「千景、前に俺が言つたこと覚えていいぞ。」

「沢田くんを好きになるなつて？」

「おう。忘れる。そんで、思つままにしろ。」

お前はいつも溜めこみすぎだ。そつ言つて、武は帰つてしまつた。好きにしろ、と言われた私はただ困惑ばかりだ。

私は、何がしたいの?どうしたいの?

別に、沢田くんを避けたいわけじゃない。前みたいにたくさん話したい。いつもの笑顔で笑つて欲しい。

好きでいたい。

たとえ、立つ場所が隣じゃなくてもいい、一般人だつていい、それ

でも、一緒にいることを許して欲しい。好きでいたい。

こんな我儘な私だけど、それでも願うなら、沢田くんにも私を好きになつて欲しい。隣に立つて、手を繋いで歩きたい。ずっと、ずっと。。。

自分の心を偽るのはもう嫌だから。だから私は、けじめをつけようと思いつ。

「京子、ちょっと話したいことがあるんだけど、いいかな？」

なるべく普段通りを心がけながら私は京子に声をかけた。

断つて欲しい。

話を聞いて欲しい。

一つの想いがせめぎ合いつ。これから彼女に言わねばならないことを考えると私の胸中は複雑だ。

「うん。いいよ。」

ふわり、と微笑まれると余計に胸が苦しくなる。私が話すのは、大事な友達である京子を傷つけることだ。それでも、もう心を偽るのをやめると決めたから。私は京子に話さなければならない。

場所を変え、私は京子と向き直つた。昼休みの屋上は込み合いつが、放課後に屋上に上がつてくる人なんて告白する人ぐらいだ。だから私たちの傍には誰もいない。

「どうしたの、ちかちゃん。とっても難しい顔してる。」

「めんね、京子。無邪気な彼女の笑みを見ていると胸が苦しくなる。

逃げ出したくてたまらなくなる。

「「」めん、京子。」

「ちかちやん？」

「私、沢田くんが好きだよ。」

私の告白に京子は大きな目を見開き、瞬きせずに私を見た。そして暫くすると悲しげに微笑んだ。

「そんな気がしてたんだ、最近。」

ツナくんのこと、あからさまに避けていたから。そうして京子は黙つた。唇を震わせて困ったように微笑んだ。

どうして、そんなに泣きたそうな顔をするのが、私にはわからなかつた。確かに、私の告白は京子を傷つけるものだけど、沢田くんの心を私が手に入れたわけではない。どちらかと言えば、京子の方が沢田くんと近い場所にいるのに。

「私の方にこそ「」めんね。ちかちやんがツナくんを避けてたのって、多少なりとも私のこと思ってくれたからでもあるんでしょう?」

素直に頷いていいものか悩んだが、京子の瞳は全てお見通しだ、と言われているような気がして、私はこくり、と頷いた。すると彼女は再び、「」めんね、と謝つた。

「私がちかちやんを追い詰めてたね。」

「違う！違うよ。私が、弱かつたの。だから、余計に傷つけたの。」

沢田くんのことも、京子の事も。

「どうして、人の想いつて上手くいかないんだ？」

「・・・。」

朗らかに微笑む京子には先ほどの泣きそうな表情は何処にもなかつた。

「ちかちやん。ツナくんと、早く仲直りしてあげてね。」

そう言つて京子は綺麗な、綺麗な笑顔で微笑んだ。私は言葉を紡げず、黙つて頷いた。

避ける癖がついてしまったのか、京子に背中を押してもらつたといつのに、私は未だに沢田くんに声をかけることが出来なかつた。

「はあ、あたしつてこんなに意氣地なしだつたつけ……。」

「しようがないよ。元に戻るのは難しいもの。」

すっかり私の逃げ場と化している屋上でため息をついている私を京子が話を聞いてくれる。

「ちかちゃん、そんなに気を張ることないよ。急べことないんだから。」

頑張れ、そう言つて彼女は笑う。京子だつて沢田くんの事が好きなに。私たちは言わばライバル関係だ。それでも京子は応援してくれる。その胸中はきっと複雑だろう。だけどそれを表に出すことはない。京子にいらぬ気を使わせてしまつてはいることが心苦しい。

「随分暗い顔をしていますね、千景。」

「うわっ！バイナップル！じゃなくて、骸さん。」

帰り道、突然現れた骸さんに私は物凄く驚いた。思わず言い間違えるくらい。

「千景、殴つていいですか？」

笑顔で言われて私は必死に首を横に振った。マジで殴られそうだったのでそれは避けたい。骸さんに殴られたら死んじゃいそう。雲雀さん並に強いって聞いたことがあるもの。

「全く、君は。人が心配しいて来て上げたというのに。ま、思ったよりは元気そうでなによりです。」

そう言つて彼は優しく微笑むと私の頭を優しく撫でた。子ども扱いする彼に恥ずかしさ半分、嬉しさ半分で大人しく撫でられていた。その手がぴたり、と止まり彼は両手を上げた。

「ただ慰めていただけですよ。」

骸さんの発言の意味がわからず私は首を捻る。すると後ろからそれに答えが返つて来た。

「何も言つてない。」

その声に私の方がびくり、と肩を揺らした。聞きたくて、聞きたくてしそうがなかつた声。でも、どうして彼がここにいるのだろう。

「じゃあそんな田で睨まないでくれませんか？空氣も刺々しいですしべ。」

「…………。」

沢田くんは無言で近づいてくると私の腕を引き、自分の背に庇つよ

うに立つた。

「沢田くん？」

状況が読み込めない私は目を瞬かせながら事の成り行きを見守るばかりだ。沢田くんと骸さんの間には火花が散っているように見えなくもない。それだけ空気がピリピリしているのだ。

「で、何でお前がここにいるんだ？」

「千景に会いに来ただけですよ。」

小首を傾げてにっこり笑う骸さんは一般女子が見たら惚れ惚れしそうだが、私には黒い笑顔にしか見えない。そして私からは表情が見えない沢田くんも笑っているような気がした。骸さんと同じ真っ黒な笑顔で。ブラック沢田くんなんて見たいような見たくないような・・・。

「そもそも僕が彼女とどうしようと関係ないと思つのですが？」

「お前、わざと言つてるだろ。」

苦々しい沢田くんの声に骸さんは楽しそうに笑つた。

「残念ながら騎士のお出ましのようなので僕は帰りますよ。それでは、千景。また遊びに来てくださいね。」

「あ、はい。」

沢田くん越しににっこり微笑まれ、私は思わず頷いていた。それと

同時に沢田くんがため息を吐いたのが聞こえた。そう言えば、黒耀には遊びに行くなつて言われていたんだつた。

「あ、あの沢田くん。」

恐る恐る声をかけると沢田くんが私の腕を掴んだままくるり、とこちらを向いた。

「…………。」

怒つてゐるのでは、と思つていた沢田くんはとても穏やかで優しい笑みを浮かべていた。思わず、声を失つてしまつてしまつ、私のその表情にくぎ付けになつていた。

「やつと捕まえた。」

嬉しそうに。とても嬉しそうに。涙が一筋流れた。

「こし・・・。」

「「あん、なさい。」

震える声で最初に出た言葉は謝罪だった。本当はもつとたくせん言いたいことがあつたけど、でも、私の口から出たのはただ一言、「こめんなさい、だけだつた。

「どうして、謝るの?」

「だつて……。」

だつて、私は君を傷つけた。たくさん、たくさん、傷つけたから。

「酷い」と、一杯言つた。それに、一杯避けた。きっと、一杯傷つけた。」

「でも、それと同じくらい俺も西崎さんのこと傷つけていたと思つ。だから、俺も『めん。』

優しい笑みを浮かべながら、沢田くんは私の涙を拭ってくれた。頬に触れた沢田くんの手が温かくて余計に涙が溢れた。やっぱり私、沢田くんが好き。好き。好き。どうしようもないくらい、溢れてしまいそつなくらい、好きで、好きで堪らない。

「骸の所に行つて欲しくなかつたのは、骸に西崎さんを取られるんじゃないかつて心配だつたからなんだ。」

「…………え？」

「それって、どういう意味……？」

私が涙を流したままの瞳で見上げると沢田くんは困つたように微笑んでいた。

「今は、もうましか言えないんだ。でも、西崎さんは誰にも渡らないから。」

それは限りなく告白に近い言葉。だけど、沢田くんはそれ以上の言葉を紡ぐことはなかった。沢田くんが切なげに目を細めて笑うから、私は頬に触れる彼の手に自分の手を重ねた。

「十分、だよ。その言葉だけで、十分。」

沢田くんは今言える限りの言葉で私に伝えてくれている。それだけで十分だから。

「ありがとう。」

沢田くんが言葉で紡ぐことが出来ないことは、私も私の気持ちを言葉にしてはいけない。だから、私は返事のつもりで、彼の頬に口付けをした。顔を放すと沢田くんは顔を真っ赤にしていた。その顔が沢田くんしさを沸騰とさせるものだから、私は頬を緩めていた。だから私はもう一度同じ言葉を紡いだ。

「ありがとう。」

## 2-1-2 覚悟（前書き）

随分更新が遅くなつてしましました。すみません。  
今回は3話連続で更新させていただきます。

「おい、千景。ツナと何があった。」

「…………。」

相変わらず鋭い。

目の前に座るリボーンから私はあからさまに視線を外し、沈黙を貫いた。だって、リボーンの目を見たら心の中全部見られそうなんだもん。いや、この時点で沢田くんとの間に何かあつたってバレバレなんですね。それよりも私が気になるのは……。

「あのさ、何で応接室？」

そう。私とリボーンがいるのは応接室。元雲雀さんの巣。

「……」は人が寄つてこないからだよ。」

「……」

突然、背後から声が聞こえて私は思い切り肩を揺らしてびびる。まさかと思いながら振りかえると雲雀さんがドアに背を預けて立つていた。

「ひ、ひ、ひ、雲雀さん？」

「……」

「……」

いや、うん。その極悪顔は雲雀さんで間違いないですね。いや、でも何で卒業したはずの雲雀さんがここに？

「雲雀さん、留年したんですか？」

「千景。いい度胸してるね。」

「じょ、【冗談です】」

トンファーを構える雲雀さんに私は両手を上げて降参の意を示した。

「わっ。」

うわ～。今、この人舌打ちしたよ。何、私のことそんなに咬み殺しあがつたのか？全然嬉しくないんですけど。

「よく考えてみろ、千景。並盛大好きの雲雀だぞ。いて当たり前だわっ。」

「ああ、確かに。」

「それで納得する頃は結構ずれると思つよ。」

びつでもよむぞうにため息をついた雲雀さんは何故か私の隣に腰を下ろした。思わず少し雲雀さんから放れた。それに気付いた雲雀さんがむつとしてこちらを見る。

「何で放れるの？」

「え……。あーそつ言えぱリボーン、何の話をしてたんだつけ？」

どり返答しても咬み殺されそうな気がして、私は無理矢理リボーンに話題を振った。

「ツナと何があつたのか。」

失敗した。それもすつゝく危うい話だった。何でリボーンに話振っちゃつたんだろ。いや、だつて他に話題振る人いないし。何、この雁字搦め。新手のいじめか!? 私はため息をつき、覚悟を決めた。姿勢を正し、リボーンを真つ直ぐ見る。

「私、沢田くんが好き。でも別に沢田くんとどうにかなつたわけではない。以上!」

「千景がツナを好きなんてことは分かつてた。問題はそこじゃねえ。」

厳しいリボーンの口調に私の掌に嫌な汗が滲む。

「ツナがお前に想いを伝えたか、だ。」

「言つてない。」

そこは即答できた。だつて、本当にはつきりした気持ちは聞いていない。あくまで告白に限りなく近い言葉だけだ。キスしたのは私から。でもあれは頬だし、ディーノなんて挨拶だつて言つてよくしてきた。

「それでも、お前らの間に进展はあつたんだろ。」

「仲直り、しただけ。」

汗でべたつく掌を私はぎゅう、と握り込んだ。そうしなければリボーンからの威圧感に耐えられそうになかったから。暫くの沈黙の後、リボーンがため息をつくのが聞こえた。

「千景。前言撤回だ。お前、もつシナに近づくな。」

「なー?」

あまりにも理不尽な言葉に私は顔を上げ、リボーンの瞳を真っ直ぐに睨みつける。

「何で、交友関係までリボーンに口出ししかねなきやならないの?」

「君が無知な草食動物だからだよ。」

いつのまにか距離を詰めていた雲雀さんが、私の顎を掬い、私の顔を雲雀さんに向けさせた。雲雀さんの言っている意味がわからなくて、私は探るように雲雀さんの顔を見据えた。でも雲雀さんの瞳は何処までも穢やかで、何の感情も読みとれない。

「君、沢田綱吉が何者か知ってる?」

「…………。」

雲雀さんが何を指しているのかわかつていい。たぶん、沢田くんの秘密のことを言っているのだ。だから知ってるか、と問われれば私は知らない。沢田くんが何者で、何を抱えているのか、何も知らない。でも、ここで屈したくなかった。

「優しくて、寂しがりやで、でも、本当はすこしく強い人です。」

「僕が言つてるのはそういうことじゃなによ。」

「わかつてます。でも、私にはそれが沢田くんの全てだし、それだけ分かつていれば十分です。」

そうだ。今まで、彼の秘密にばかり気を取られていたけど、沢田くんがどんな人間か、それだけ分かつていれば後はどうでもいい。例え沢田くんが実は犯罪者だった、とか言われたつて私の中の沢田くんは沢田くんでしかない。だったらもう、彼が何者だって構わない。

真っ直ぐに雲雀さんを見据えて言つ私に彼は少し驚いた様子だった。そして雲雀さんは何処か悲しげに、いや、残念そうに微笑んだ。そつと私の頬を撫で、彼は言つた。

「それだけじゃ、沢田綱吉の傍にはいられないよ。」

その言葉は静かに、でも重く私の心に衝撃を与えた。

どうこう、ことつ？

「千景、あいつは卒業と同時に日本を発つ。」

私は目を見張つた。

この赤ん坊は、今、何て言つた…？

「あいつはお前を連れて行かないだろう。」

渡り廊下の途中。空を見上げ、ぼーっとしてると遠くから足音が聞こえてきた。

「西崎さんーよかつた、やつと見つけたよ。」

「沢田くん…………。」

「応接室に呼ばれてたから何があつたのか心配してたんだ。」

「ちよつと、リボーンと話してた。」

リボーンの名前が出ると沢田くんの表情が強張った。

「その後雲雀さんが来て、一緒にお茶飲んだ。」

にっこり笑つて言えば、想像したのか沢田くんは青ざめていた。うん。普通に考えたらかなり怖い状況だよね。

「大丈夫だった？」

「…………うん。」

心配そうに尋ねてくる沢田くんに私は笑つて頷いた。彼はほつと息をついて微笑んだ。

「帰りや。」

差し出された手に、私はそつと自分の手を重ねた。そうしたら沢田くんが強く握り返してくれた。

“あいつはお前を連れて行かない。”

あの言葉を思い出し、私は思わず握る手に力を入れた。

“別れの覚悟を済ませておけ。”

「西崎さん？」

さよならをする覚悟が、私に出来るだろつか……。

「沢田くんの卒業と同時にみんなでイタリアへ行くって本当ですか？」

私の唐突な質問に骸さんは目を見開く。その表情がリボーンの言ったことが事実であるとありありと証明していた。

「……アルコバレーノから聞いたのですか？」

黙つて頷けば、骸さんはため息をつき、私の頭を撫でた。

「骸さん、私はどうすればいいですか？」

私は間違いなく、一步沢田くんたちの世界へ近づいた。沢田くんと想いが通じ合って、浮かれていたけど、私と沢田くんの前には問題が山積みだ。彼が誰であろうと構わない。でも、そのことが問題で私が彼に置いて行かれてしまうなら、知りたい。それとも、知つたところで沢田くんは私を連れて行つてはくれないのだろうか。

「どうしたって、沢田くんは私を連れて行つてはくれませんか？」

「連れて行かないと思いますよ。」

即答され、私は縋るように見上げていた骸さんの顔から視線を外し、俯いた。ああ、やっぱり、と思つたけど、それでも悲しくて。置いて行かれるなら、何故彼は私にあんなことを言つたのだろう。それとも、あれは私の自惚れだつたのだろうか。

「沢田綱吉は君を守れると自信を持つて言えるようになるまで君を連れて行かないでしょう。……君が大切なんですよ。」

顎を掏われ、強制的に顔を上げさせられた私の瞳に優しげに、寂しげに微笑む骸さんが映つた。

「千景、少々厳しい」とを言つてもいいですか？

「…………はい。」

「君は無知だ。無知な君は沢田綱吉の重荷にしかならない……君が彼に今できるのは、突き放すことだけですよ。」

そう言つて骸さんは私を残し、行つてしまつた。彼がいなくなり、一人にきりになると、私の瞳から自然と涙が零れ落ちた。私は座つていたソファから滑り落ち、地べたにぺたり、と座り込んだ。

“君が無知な草食動物だからだよ。”

雲雀さんの言つた言葉の意味が今、わかつた。それだけでは傍にいられないといった意味も。

確かに、無理だ。彼の人間性を知つていいだけでは、私は沢田くんの傍にはいられない。支えにはならない。それどころか、ただのお荷物だ。日本で彼の迎えを待つことさえ、彼の負担になるだろう。だつて、デイーノがそうだつた。私が何も知らずに彼を求めたから、待ち続けたから、デイーノはとても苦しんだ。

私の存在は、沢田くんを傷つけることしかできない。だからリボンは私にストップをかけようとしたんだ。意地悪でなく、私と沢田

くんのために……………！

あまりにも無知な自分が悔しくて、悲しくて、涙が止まらない。どうして、つまらないかないのだろう。どうして、好きになってしまつたんだわ。びひじい、じうじい、じひじい…………。

同じ言葉が何度も頭を廻り、私は涙を止められない。

「千景。」

名前を呼ばれ、私は緩々と顔を上げた。彼のそんなに優しい声を聞いたのは久しぶりな気がする。

「…………リ、ボー…………。」

嗚咽を飲みこみながら田の前の赤ん坊を見れば、その大きな瞳に優しい色を宿しながら彼は私の頭を撫でた。

「だから散々忠告したんだ。」

言葉は始めるものなのに、その声色はどこか優しい。たぶん、私が理解し、自分のしなければならないことを理解したからだろう。リボーンだって私にこんな決断をさせないために私に厳しいことを言ってくれていたのだ。でも…………。

「それでも、私は……、沢田くんを、好きになつたと、思つ…………。」

「そりか。卒業までもまだ時間がある。思い出を心に刻め。」

その後、リボーンは私が泣き止むまでずっと傍で頭を撫で続けてく

れた。

無知であることは幸せだったのか、それとも罪だったのだろうか…

…。

自分がしなくてはいけないことを自覚した私だけど、決して沢田くんから放れようとはしなかった。リボーンもそこは了承している。だから何も言わない。私が秘めている決意など知らない沢田くんはいつもと変わらず優しい。

「わ～、雪が降つて来たよ！」

帰り支度をしている頃、京子が窓の外を見て、声を上げた。自分の席を離れ、窓を見てみると確かに真っ白な粒が空から降つて来ていた。季節が冬を迎えていたのだと、改めて実感する。窓を開け、手を伸ばせば、純白の粒が私の手に触れる。

「…………冷たい。」

「ちかちゃん？」

「雪、久しぶりに見たね。」

拳を握り、それを教室の中へと引っ込めると、私は隣で不思議そうに見上げてくる京子に微笑んで見せた。そうだね、と言つて京子は再び外の景色に目を移す。そうして2人で雪空を見上げていたら、ガラツ、と扉の開ぐ音がした。

「西崎さん、京子ちゃん。お待たせ。」

ふにやり、と微笑む沢田くんの後ろから武と獄寺くんも入つて來た。今日は武の部活がないので久しぶりにみんなで帰ることになつてい

た。

時が進むに連れて、私が沢田くんたちの輪の中にに入るのは当たり前になりつつあった。以前は別々だった帰りも今は一緒に帰ることの方が多いし、沢田くんの家にだって、もう数え切れないほど行った。

それでも私は彼等の輪の中に本当の意味では入れないのだろう。

「もうすぐ冬休みだな。」

「武はさじひ毎日部活でしょ？」

「ははひ。まあな。」

「野球バカめ。」

「獄寺くん、それ、山本にとつては褒め言葉なんじやないかな。」

「もつあだ名みたいになつてるよね。」

他愛のない話をしながらみんなで歩く。話題は冬休みからその前にある期末試験、それ以外にも昨日のテレビの話や今日学校であつた出来事など。話題は尽きない。そしてそのまま別れ道へと差し掛かる。

獄寺くんと京子ちゃんが左、私と武は右、沢田くんは真っ直ぐ。でも今日、私は沢田くんと同じ道を行く。少しでも長く、沢田くんと一緒にいたいから。

「じゃあね、みんな。」

「バイバイ、ツナくん、ちかちゃん。」

「失礼します、10代目。」

「じゃあな~。」

手を振り合って、私たちは別れる。私は胸の前で拳を握り、みんなの後姿を見送った。きっともうすぐ、永遠に見れなくなる。

「西崎さん~。」

「行こうか、沢田くん。」

微笑み歩き出せば、沢田くんは頷き私に歩調を合わせて歩いてくれる。

「寒くなつたね。」

「すっかり冬つて感じ。」

冬の寒さですっかり冷えきつた手をこすり合わせ、息を吹きかける。ほんの一瞬温まるがすぐに冷えてしまう。そうしていたらすっと手が差し出された。顔を上げれば照れ臭いのか、寒さのせいなのか、顔を赤くした沢田くんがいた。その手の意味がわからず首を捻ると苦笑した沢田くんが私の手を握った。

「ひしたら少しは温かいでしょ？」

「…………ありがとう。」

その笑顔はさうる」と思う。そんな優しい笑顔、ずるい。恥ずかしくて、私は視線を反らす。沢田くんは一瞬で私の心を掴んでしまう。翻弄されるばかりで少々悔しい。

「冬休みが開けたら、最後の学期か。」

ふと呴かれた言葉に私は思わず足を止めてしまつ。突然歩みを止めた私を沢田くんが不思議そうに見下ろす。

「どうしたの？」

穏やかに笑つて問いかけてくる沢田くんに私は一拍遅れてなんでもない、と返事をした。そして私たちは再び歩き出した。

何で、そんなに穏やかな顔で先の話をするの？

私は沢田くんに気付かれないように唇を噛んだ。そうしなければ泣いてしまいそうだったから。いつか、来てしまひこの手を放さなければいけない日が怖くてしょうがない。

「冬休み、2人で何処かに出かけようか。」

照れてはにかむ沢田くんの笑顔を見ると余計にこの手を放したくないと思う。わかっている。別が来るることは変えられない。

ならばせめて、もっと時間がゆっくり流れてくれればいい。

冬休みなど来なればいい。

この銀世界の中、私と沢田くんの2人きり、時を忘れて過ごしていく  
ければいいのに……。

無理だと分かっていてもそう願わずにいられない私は、愚かなの  
だろうか……。

少しづつ近づく別れの時を、私は受け止めあぐねていた。好きなのに…。大好きなのに、どうして離れなければならぬんだらう。どうして、一緒にいられないのだろう…。

冬休みには2人で出かけて、クリスマスを一緒に過ごして、一緒に初詣に行つて…。限られた時を私はなるだけ多く沢田くんと過ごした。毎日に幸せを感じれば感じるほど、日々が過ぎていくことが悲しかつた。

そしてとうとう、高校生活最後の学期に入った。1月一杯は学校に通う私たち3年生だが、2月からは自由登校に入る。私は東京の大学に進学が決まつていて。そして沢田くんは…。

「沢田くんは、卒業したらどうするの?」

知っていたけど、沢田くんから聞きたくて、私は尋ねた。今にも泣きそうになつてしまふ自分を奮い立たせ、必死に笑顔を作つた。沢田くんは困つたように笑い、歩いていた足を止めた。そして、真剣な顔で私の顔を見返してきました。

「本当はもう、知つているんだよね。」

「……知つているよ。でも、沢田くんの口からちゃんと聞きたい。」

「俺は… イタリアへ行くよ。」

田を反りたず、真つ直ぐにそう告げてくれた。わかっていたことだ。

わかつっていたことのはずなのに。別れは、覚悟していたことなのに……。

「西崎さん、俺……。」

「私、待つたりしない。」

沢田くんの言葉を遮り、言った。

「沢田くんを待つたりしない。追いかけたりもしない。もう待つのは嫌だから。」

君の重荷になるのはもつと嫌だから。だから……。

「だから、今日でよならじよ。」

「……。」

沢田くんは私の言葉に肯定も否定もしなかった。ただその瞳は悲しげに揺れていた。お願いだから、そんな瞳で私を見ないで。泣き出しそうな心を見透かさないで。

突然、握っていた手を強く引かれ、気がついたら沢田くんの腕の中にいた。

「いめん。」

突然のことには頭がついていかない。どうして彼は謝っているの?どうして置いて行くのに抱きしめるの?

私は、君の重荷にしかなれないのに……！

悔しくて、悲しくて、涙が溢れてきた。腕の中から出ようとがくが、彼は放してくれなかつた。

「嫌！放して！」

「…………。」

「置いて行へくせに！何も、話してくれないくせに！……句で！句で！何で！」

沢田くんの腕の中で暴れ、彼の胸を何度も何度も叩いた。それでも彼は私を放さず、寧ろ強く抱きしめてきた。

「好きになつて、『めんね。』」

その言葉に、私の動きがぴたり、と止まつた。何て、何て悲しい声で言つたのだろう。顔を上げれば、切なく揺れる沢田くんの瞳と目が合つた。

「俺が君を好きになつたから。諦められずに近づいたから。傷つけた。」

悲しみに満ちた沢田くんの表情はまるで泣いていたようだつた。

……違う。違うよ。私は、君を好きになつたこと、後悔なんてしない。想いが通じ合つたこと、後悔なんてしてない。ただ、悔しかつただけ。置いて行かれることが、君の重荷になつてしまつたことが……。悔しかつただけなの。

そんな悲しい顔をさせるために、別れを切り出したんじゃない。

「俺のことを、忘れて。…………それよつなり。」

放れて行く温もりに、私は縋ることも、言葉をぶつけることも出来なかつた。

違うのに。

こんな別れ方をしたかつたわけじゃない。  
こんな風に傷つけたかつたわけじゃない。

どうして…。

どうして、私は追いかけられないの？

どうして、違うのだと、伝えられないの？

どうして……。

そう問うくせに、私の中で答えは出ている。怖いのだ。伝えたところで何も変わらない現実を受け入れるのが。これ以上、傷つくのが。

私はただその場に立ちつくし、泣くことしか出来なかつた。

## 2・16 幼なじみ

沢田くんに別れの言葉を告げてから、私と沢田くんは言葉を交わさなくなつた。突然の変化にみんな心配してくれた。でも私は笑つて誤魔化し、もういいのだと言つた。

自由登校が始まり、私は春から一人暮らしをするためにその準備に追われていた。そうしているとあつという間に卒業の日が間近に迫つて來た。それは、本当に沢田くんとやよつならをする日。

「千景！」

窓の外からの呼びかけに私はのろのろと窓を開け、下を見た。

「武？」

「ちよっと下りてこい。」

真剣な顔でこちらを見上げる武に私は目を瞬かせる。彼ももうすぐイタリアへ行く。そのための荷造りやらなんやらで此処の所全く会つていなかつたのだが、そんな忙しい彼が何のようなのだろう。不思議に思いながら外に出るといきなり武に腕を掴まれ、彼はそのまま歩き出した。

「ちよ、何なのよー武ー？」

「俺達、今日、日本を発つんだ。」

「…………え？」

止まりそうになつた足を武が半ば引きずるよつて私を引っ張つて歩かせた。

「だつて、卒業式は？」

「出ない。誰にも言わないはずだつた。でも、今のお前らは見てられねえんだ。千景のそんな顔もツナのあんな顔も見ていたくない。」

だからもう一度会え。武はそう言つ。でも、今更沢田くんに会つてどうしろといふのだらう。私はちゃんと自分で答えを出して、沢田くんに別れを告げたのだ。さよならを、告げたのだ。今更彼に会つて、何を言えといふの？

「私行かない。」

「千景！」

「だつて、今更私が行つて何になるのー？私が何を言つのー？私の気持ちは変わらないし、沢田くんが私を連れて行かないつていうのも変わらない！会つて何になるのー？」

「じゃあ後悔しないのかー！」

両肩を掴まれ、武はすごい剣幕で怒鳴つてきた。初めて、武に怒られた。

「俺は…、千景が好きだつた。」

「…。」

「伝えずに入ることをずっと後悔してた。お前がティーノさんとの事で傷ついたのに、何もしてやれなくて、後悔した。俺はすげえ後悔したんだ。だから、お前は後悔する道を選ぶな。ツナとの思い出を悲しいものにするな。だつてお前、ツナのこと大好きだろ?」

瞳に涙をためながら、私はこくり、と頷いた。それを見て、武はいつもの笑顔を私に向けてくれた。じゃあ、急がなきやな、そう言って私の手を握り、再び走り出した。

目の前の武の背中が大きい。いつのまに、彼はこんなにも大きくなつたのだろう。いつから、私を護ってくれていたのだろう。何も知らず、私は武に甘え続けていた。

「ありがとう、武。ありがとう…。」

大好きだよ。そう続けようとしたけど、それは言つてはいけない気がした。だつて、私の好きと、武の好きは違つから。

「ありがとう…。」

「おひ… 千景、お前が後悔しない道を選べ。」

私の手を握る武の手に力が加わった気がした。だから私は意志表示に強く握り返した。

ありがとう、優しい人。私の大切な幼なじみ。

「ツナ！」

空港に現れた私を見て、みんなが驚いていた。でも沢田くんが一番驚いていた。瞳を大きく見開いて、何度も口を開けたり閉めたりしていた。

「小僧。まだ時間あるよな。」

武がリボーンに視線を向けると彼は深々とため息をついた。しかしその表情はどこか穏やかだ。まるで予想していたかのようだ。

「ツナ。搭乗時間までまだ時間がある。話したけりゃ行つて来い。」

呆然としている沢田くんに蹴りを入れ、私の目の前まで押しやる。私よりも頭一つ分大きい沢田くんを見上げる。彼はこの1年ほどで随分身長が伸びた。それに昔よりずっと男らしくなった。こりや、女が放つてはおかしいだろう。そう思い、苦笑する。この人を繋ぎとめておく自信が私にはない。

「…………。」

みんなから放れて2人で向き合つものの、互いに無言のままだった。何を話せばいいのかわからず、私は沢田くんの顔を見ることさえできなかつた。

「……見送りに来てくれたの？」

先に口を開いたのは沢田くんだった。あんまり優しい声で、涙が溢ってきた。泣いていてもしようがないのに。泣いたって私の想いは伝わらないのに。そんな私の頬に沢田くんのちょっと骨ばったでも綺麗で暖かな手が触れた。そっと指の腹で私の涙を拭ってくれた。

「また、泣かせた。…ごめんね。」

「違うの！」

彼にこれ以上悲しい顔をしてほしくなくて、謝つてほしくなくて、私は顔を上げた。だってこんな顔をさせたかったわけじゃないから。私は、私は……！！

「沢田くんが好き。」

頬に触れている彼の手に自分の手を重ね、真っ直ぐに沢田くんの瞳を見て言った。彼の瞳が大きく見開かれた。

「傷つくのは…、悲しいのは…」沢田くんが好きだからだよ。だからお願い…。謝つたりしないで。」

自分でもわかるくらい、声が震えている。今にも俯いてしまいそう。でも、ちゃんと沢田くんの顔を見ていたい。沢田くんから目をそらしたくない。

「私は…、沢田くんを好きになつたこと、後悔なんてしてない。また人を好きになれて、よかつた。君を好きになつて、よかつたよ。だからお願い。そんな悲しそうな顔をしないで。お願い。私との出会いを後悔したりしないで。」

言葉で伝えきれない気がして、私は彼に近づき、背伸びをすると、沢田くんの脣に自分の唇を重ねた。ほんの何秒間の口付けが、私は永遠のようにさえ思えた。

「愛してる。」

身を放し、やう告げれば、田を見開き驚いていた沢田くんの表情が泣き出しそうに歪んだ。それを隠すように私の肩に顔を埋める。

「俺も君が好きだよ。誰よりも、誰よりも愛してる。でも、だからいや、連れていけない。」

声が震えている。私を抱きしめる腕も微かに震えている。もしかしたら、彼は泣いているのかもしれない。1ミリだつて放れたくないで、私は彼の背に手を回した。そうしたら、より強く、沢田くんは私を抱きしめた。

「好きなのに…！好きだから…！連れて行く訳に行かないんだ。」

彼の悲痛な叫びが胸に響く。どんどん強くなる抱きしめる腕が、放したくないと言われているようで。嬉しいはずなのに、今はただ切なくて、また頬を涙が伝った。

そつと沢田くんが身を放し、私の頬を包んだ。ビシビシからともなく近づき、私はそつと目を閉じた。

唇に柔らかく、暖かな温もりを感じる。吐息が混じり合つ。このまま、ずっと一緒にいたいの。そんな想いが頭を過る。

唇が放れ、温もりも放れて行く。私は縋るように沢田くんの手に頬

を寄せた。暖かい、大好きな君の手。この手がいつか誰かの物になつてしまつのなら、それはとても悲しい。でも、沢田くんはこの手で守るもののがたくさんあるから。独り占めには出来ない。でも、願うことだけは許されるだろうか。

「誰のものにもならないで……。」

「……。」

呟くように紡がれた言葉に沢田くんは肯定も否定もせず、優しく微笑んだ。その表情に悲しみはない。

「ツナ、時間だ。」

リボーンの声が、私たちに別れの時を告げた。

「分かった。」

沢田くんの手が放れて行く。その手を私が掴むことはもうなかつた。沢田くんは私に背を向け、歩き出し、数歩行つたところで止まつた。振り返り、優しい笑みを浮かべたまま口が開いた。声になることのなかつたその言葉は確かに私に届いた。

（愛してゐる。だから、さよなら……。）

彼は確かにそう言つた。涙が後から後から溢れて来る。本当は行かないで欲しい。置いて行かないで欲しい。連れて行つて欲しかつた。でも、それは出来ないから。だから別れるしか道はなかつたのだ。

「愛し……、いる。」

さよなら。愛してゐるから、誰よりも大切だから、だから……、  
さよなら……。

2-17 やよなら（後書き）

次回から三章に突入です。

### 3・1 君のいない日々

卒業式を迎えて、私は大学生になった。

東京での一人暮らしは最初こそ不安でホームシックにもなったけど、馴れてくれば、自分の城が出来たようで自由気ままに生活を送れるのが楽しくなった。

当たり前のように春が過ぎ、夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が過ぎ……、そうして季節は廻った。

変わったことはたくさんある。

短かつた私の髪は今では胸ぐらいまで伸びた。少しは化粧もするようになつた。大学の友達はたくさんできだし、何度か告白もされた。周りも私も色々変わつていく。変わらない物なんてありはしないのに……。

そんなある日、花から連絡が入つた。

懐かしい高校時代の友人からの誘いにその週の末、私は並盛の町に一度戻つた。ほぼ2年ぶりに戻つた並盛は何も変わっていなくて、心まで高校時代に戻りそつた。

「千景。」

懐かしい声に振り返れば花が立つていた。懐かしい友人に私の頬は自然に緩み、彼女に向かつて駆け出した。

「花！久しぶりだね。」

「本当よ。あんた、全然帰つてこないんだもの。」

花は地元から通える大学に通つてゐる。だから本当は私が並盛に戻つてくれば会えるのだ。暗にもつと頻繁に帰つて来いという花に私は

は曖昧に微笑んだ。

私たちは高校時代からお気に入りの店、ナミモリー・ヌに入り、紅茶とケーキを注文して最近の出来事を話して盛り上がった。大学の講義は眠いとか、サークルはどうだ、とか…。

「千景は好きな人できたの？」

「花はできた？」

花の質問に私は質問で返した。そんな私に花はため息をつくと自分の事を話してくれた。

「彼氏できた。」

「嘘！？やつぱ年上？」

「嘘つてなによ…。年上だけど、全然年上っぽくないけどね。」

年上だけど年上っぽくない人…。花がそんな人と付き合つなんて…。たぶん呆けた顔で花を見ていたのだろう、何の前触れもなくでシンされた。

「それで、あんたは…まあ、どうせいないんだろ？けど。」

私は苦笑するしかない。好きな人はいる。高校生のときからずっと好きな人。でも、彼を想つていたつてしまふがないとわかっているから。言葉には出したくないんだ。

「まだ、沢田が好きなの？」

「……。」

花の質問に私は肯定も否定もしなかった。私は目の前の花から視線

を外し、窓の外を見た。

何も変わらないこの町。だけど、この町にももう、沢田くんはいない。

帰つてこない。

会いたくても、会えない。

「早く誰かを好きになれたら、楽になれるのかな…。」

「千景…。」

「ねつ！花の彼氏ってどんな人？」

花とはその後、彼女の彼氏についてずっと話していた。私に対する質問の余地を与えない勢いで私は花に質問した。何でも花の彼氏さんは海外で仕事をしているらしい。そのためあまり会えないのだという。

すぐに頭に血が上つてしまふが意外と女性に気が遣える紳士な部分もあるらしい。

時折憎まれ口を加えながらも彼氏さんの話をする花の表情は幸せそうだった。

「じゃあね、花。彼氏と幸せに。」

帰り際、花にそう言つて手を振つた。次会えるのはいつかわからないうから。

「千景！」

何処か切羽詰まつた花の声に振り返ると、花はとても悲しそうな顔をしていた。彼女の言おうとしていることがわかつて、私は笑つた。

「大丈夫。」

そつと聞いて今度こそ、花と別れた。私は真っ直ぐ家には帰らず、懐かしさ漂う並盛の町を歩いていた。並盛中、高校、通学路に公園、穂円さんのお店にも顔を出した。

そしてそのどの場所にも沢田くんとの思い出があつて、愛しくて、切なかつた。

沢田くんのいない毎日はとても寂しくて、まるで世界から色が消えてしまつたかのように味氣ないものになつてしまつた。友達もたくさん出来て、大学生活も充実していて楽しいはずなのに物足りなさを感じる。

色々な変化が起る毎日の中で私の心は変わらずに沢田くんを求めている。狂おしいほどに沢田くんを想つている。

「大丈夫」。

それは私の呪文の言葉。沢田くんがいない毎日に負けないで笑つているための。

それでもね、時々どうしようもなく寂しくなるの。

青空を見上げた時、雪の降り積もつた銀世界を見た時、甘めのカプチーノを飲んだ時……。

どうしようもなく、君に会いたくなる。

君の声で名前を呼んで欲しくなつて、骨ばつた、でも綺麗な君の手の温もりを感じたくなる。抱きしめて欲しくなるの。

君のいない日々はなんて……、息苦しいのだろう……。

### 3-2 イタリア（前書き）

今回、短いです。

### 3・2 イタリア

再び大学生活に戻った私の元に一通の手紙が届いた。

それは以前、バイトでお世話になっていた叔母の穂月さんからのものだった。

先日、並盛に帰った際も一応顔は出したのだが、そこにはたくさん

の思い出があつて、すぐに出てきてしまったのだった。

「それにしても、穂月さんが私に手紙なんて珍しい…。」

独り言を呟きながら封を切った。

中には手紙と航空券が入っていた。それを不思議に思いながら手紙を開き、その内容に私は目を見張った。

千景へ

久しぶり。まあ、この間会つたばかりなのだけれど。  
手紙を書いたのは以前に会つた時に話すのを忘れていたからなの。  
実は、コーヒーの勉強に一度イタリア旅行に行こうと思っているの。  
だから千景も一緒にどうかと思つて。

あなた、大学でイタリア語を専攻してゐるんでしょ？

役に立ちそうだし、旅費はこっちでだすから。

夏休みに入つたらすぐにいくから準備しておいてね。

穂

月より

航空券を送つてきてている時点で私の意見を聞く気はないな。ていうか、手紙の内容も誘いつていうより決定事項だし…。  
手紙と航空券を睨みながら私はため息をついた。  
イタリアか…。

そこに行つた人を想い、私は再度ため息をつく。

沢田くんはもう、私のことなど忘れてしまつただろうか…。

イタリア旅行。

偶然にしろ、必然にしろ、沢田くんのいる場所に行けるといつのは何かあるのかもしねりない。カレンダーを見れば、夏休みまであと数週間。少しずつたくした方がいいかな。

……ていうか、穂月さんはどのくらいの間行くつもりなのだろうか？

「ボンジュール、イタリア！！」

空港に辿り着くや否や声を上げる穂月さんを他の客が凝視する。そして私は知らないふり。

「行くわよ、千景！ ホテルに荷物を置いて、さっそくコーヒーを飲みに行きましょー！」

腕を引っ張られ、私の知らないふりは失敗に終わった。無駄にテンションの高い穂月さんに苦笑する。

元々穂月さんはイタリアにコーヒーを飲みに来たかったのだそうで、今までこつこつと旅費を溜めていたらしい。そんな訳で旅費を払ってくれるとこう穂月さんの申し出を断り、私は自分のバイト代と今までのお小遣いを合わせて今回の旅行に同行した。

ホテルまでの道を歩きながら、私は初めて見るイタリアの街並みを見まわしていた。どの建物も日本の質素な物と違つてお洒落だ。カフェにしたつてどこも綺麗だったり、可愛かつたり……まるで絵本のおとぎの国に迷い込んだような気分だ。

「穂月さん、あとで色々と回つてみてもいい？」

さつそくカフェに入り、コーヒーを飲みながら私はガイドブックを開きながら穂月さんに尋ねた。

「いいけど、私は予定があるから一緒に回れないわよ。」

「うん。穂月さんの用事が済む間だけだから。」

好きにしなさい、と穂月さんは穏やかに微笑み言った。

もうすぐ40歳になると黙っていたけど、この人は昔から変わらず綺麗だ。イタリアの男性だらうと誰だらうと魅了してしまいそうだ。

穂月さんの用事が済むまでの3時間程を私は一人で観光することになった。ガイドブック片手に行つてみたかった場所やイタリアでも有名なカフェなどに行つてみた。

有名と言われるだけあって、そのお店のコーヒーはなかなか美味しい。でも、ちょっと高級感が溢れていて、私には向かないかも。

そんなことを思い、お店の外に出ると向かい側に真っ黒なりムジンが止まっていた。リムジンなんて初めて見るものだから思わず立ち止まって見入つてしまつた。

リムジンの扉が開き、現れたのは……薄色の髪だった。

私が、彼を間違えるはずがない。

息が、止まるかと思った。だが、続いて出てきた人を見て、私は背を向け、走り出していた。

金に近い茶の髪。髪は長くなつていたが、あれは京子だ。

知らない女人が隣にいる以上に私はショックを受けていた。彼女は確かに沢田くんと一緒にイタリアへ渡つた。だから一緒にいるのは不思議じゃない。

でも、2人は腕を組んでいた。どう見たつて恋人同士にしか見えない。

どうして、よりもよつて京子なのだろう。これならまだ、知らない女人を愛してくれた方がよかつた。

だつて、京子は全部知つているのに。

私が、沢田くんを好きなことも、沢田くんが私を好きでいてくれた

ことも、放れるしかなかつたことも……。

だけど彼女は今、沢田くんの一番近い所にいる。

それが羨ましくて、悔しい。なんて、浅ましいんだろう。私は彼の幸せを願つていたんじゃないの?だとしたらこれは、私の望んだ結果じゃない。

……本当に?

私は、本当にこれを望んだ?

違う……!

だつて、心の何処かで期待していた。

私が今でも彼を好きでいるように、彼が私を愛し続けてくれていることを。また出会い、笑顔を向けられるその時を、私は期待していた。

今でも彼に愛されていることを。

苦しくなる胸を抑えて、泣きだしそうなのを我慢して、小さな声で呟いた。

「何であたしだけ、こんなに苦しきの……?」

今でもこんなに好きなのに。好きすぎて、君のいない日々に息をするのも苦しいのに。どうしたら私はこの苦しみから抜け出せるの?

「千景?」

名前を呼ばれ、びくり、と肩を揺らす。恐る恐る振り返ると、そこに立っていたのは武だった。

懐かしい幼なじみ。彼は驚きに目を瞬かせていた。そして私の顔を見て眉を寄せる。

「どうした？何かあったのか？」

「何も、ない。ちょっと道に迷っただけ。でも、大丈夫だから。」

顔を背け、すぐに歩き出そうとした私の腕を武が掴んだ。

「何？」

「ツナに会いに来たのか？」

脳裏に懐かしの薄色の髪が浮かぶ。固く目を閉じ、それを振り払う。

「穂月さんと旅行に来ただけ。」

「そうか。」

暫くの沈黙の後、私は小さな声で言った。

「言わないで。」

「え？」

「私に会つたこと、絶対沢田くんに言わないで。」

「…何で？」

「もう関係ないからよ！」

涙で滲んで武の顔がよく見えない。でも、なんとなく困惑しているのがわかる。そんな顔をむけられれば余計に自分が惨めに思えた。勝手に期待して、勝手に落ち込んで。そんな自分が惨めで、愚かしくて……。

これ以上、そんな気持ちになりたくないかった。

「ちか…。」

「放して！」

思い切り腕を引き、武の手から逃れようとするが彼は放してはくれなかつた。直も暴れ続ける私を武は抱きしめた。

「千景、落ち着け。」

優しく背中を撫でられ、私は少しづつ落ち着きを取り戻し始めた。混乱は大分納まつたが涙は止まらなかつた。

「ツナに会いたくねえなら無理に会わせよとはしねえ。でもも、せめて俺に送らせててくれ。今の状態で一人にさせるのは心配だから。」

武の腕の中で「ぐづ、と頷けば、よし、と頭上から明るい声が聞こえた。

靄のかかる頭の中に、沢田くんの最後の優しい笑みと言葉を思い出していた。

（愛してる。だから、さよなら…。）

あの日、沢田くんはきつぱりと私と別れたのだ。未練をあの場に残し、私の存在も消したんだ。  
さよなら出来ていなかつたのは、私だけ…。

あの後、どうやってホテルまで戻つて来たのか、薄らとしか覚えていない。とりあえず武に手を引かれながら帰つて来た。その後すぐにベッドに入つて泣きつかれたのか眠つてしまつた。朝になって目が覚めた時にはもう、武の姿はなかつた。

昨日の出来事全てが夢であればいいと思つたが、テーブルの上にあつた置き手紙が昨日のことが現実だと訴えて来る。

『時間を作つてまた来る。ゆっくり休めよ。

武より』

手紙を呼んで、私は深々とため息をついた。  
律儀と言つたが、なんといつたか。別に会いに来てくれなくていいのに。武は沢田くんに繋がつていて。それはどうしたつて私を苦しくさせた。

「千景、起きたの？」

「…おはよう、穂円わん。」

精一杯の笑顔を浮かべて穂円さんを振り返れば、彼女は心配そうに顔を歪ませた。

「無理しているでしょ。」

「無理、しているのかな…。」

苦笑する私に穂円さんはため息を吐くと「コーヒーを淹れるから」と言って私を部屋にあるソファに座らせた。ふかふかのそれに腰を下ろし、目を閉じる。

薄色の髪が蘇る。

……顔くらい、見ておけばよかつたかな。

どんなに苦しくても、悲しくても、それでも私は彼を嫌いにはならない。

「ねえ、穂月さん。」

「何?」

丁度「一ヒーを淹れて戻つて来た穂月さんに私は問いかける。

「忘れられない人つている?」

「……いないわ。」

残念ながらね、と少し茶目つ氣を含ませて言つ穂月さんに私は力なく微笑んだ。

「千景にはいるの?忘れられない人。」

「……高校3年生の時に別れた人が今でも好き。でもその人は、今はもう別の人と幸せになつてているみたいなの。それが、すぐくつらい。」

「

別れることに納得したはずなのに。彼の幸せを願い、忘れられても構わないと思つたのは嘘ではないのに。いざ目の前に突き付けられた現実は悲しかつた。

「毎日を泣いて過ごすくらいなら、忘れてしまいたいのに。……どうしたら忘れられるかな。」

「どうして?」

「え?」

「どうして忘れないの?彼がもう、千景を好きじゃないから?」

心底不思議そうに聞かれて私は戸惑つ。違つとも違わないとも言えなかつた。確かに、彼が私を好きじゃないのはつらい。でも、忘れてしまいたい本当の原因はそこじゃない。

苦しいからだ。

「思い続けるのが苦しいから。悲しくて、惨めな気持ちから逃げたいから…。」

惨めにやせるこの現実から逃げてしまつたかった。今でも沢田くんを想い続ける自分は惨めで愚かだ。そんな気持ちになるのは嫌だつた。

消し去りたい、忘れたい…！…！

「だからつい今の自分の気持ちまで否定する必要があるの？」

「え？」

「確かに相手から気持ちを返されないのはつらいし、苦しいわ。でも、だからって惨めに想う必要はないわ。だって、あなたはそれだけその恋に本気だつてことでしょ？そんな感情を抱いてしまうくらい、彼が好きだつてことでしょ？それは誇るべき気持ちだわ。」

「この醜い気持ちが？」この浅ましい思いが？本当に誇れる気持ちだろうか…。

不安に揺れる私の瞳に気がついたのか、穂月さんは優しく私の頭を撫でた。

「好きでいることを素直に受け入れなさい。そうしたら、きっと少しは樂になる。」

「…好きだから、苦しいのに…。」

「許してあげないからよ。醜い感情を抱いてしまう自分を。だから、

本当の意味で許してあげて。彼を好きな、あなた自身の想いを…。」

抱きしめられ、私の瞳から涙が一筋零れた。

私は、許せるだろうか…。

この醜い感情全てを受け入れるのは難しい。そう簡単にはいかない。たぶん、当分の間は苦しむと思う。でも、出来ることなら…。

私は、私を…。

沢田くんを好きな私を許してあげたい。

### 3・5会いたくない理由

イタリア旅行3日目。武が本当にやつてきた。意外な人物と共に

「まさか沢田くん第一主義の獄寺くんがやつてくるとは…。」

「ふん、莫迦にすんな！俺は今でも一〇代目一筋だ！」

「ああ…、そうなんだ……。」

見た目は大人びても中身は莫迦な獄寺君のままなんだね。

「残念なものを見るような眼で俺を見るな！」

「ははっ。相変わらず仲良しだな。」

「私たちが仲良しに見えるなら、武の眼は節穴だね。」

「千景、目が笑つてねえぞ。」

珍しく武が引き笑いを浮かべる。怖いもの知らずの武でも幼なじみの私の作り笑いは怖いらしい。昔仕込んでおいた甲斐があつたな。

「相変わらず黒いな。」

「ちょっと待つてよ。相変わらずつて何！？」

聞き捨てならない言葉に獄寺君を睨むが彼は顔を反らし、ビニ吹く風といった様子だった。

「こいつ、殴つてもいいだろ？　…」

「あのね、黒いっていのはリボーンとか骸さんとかリボーンの事を言つんだよ。」

「リボーンさんが2回入つたぞ？」

それぐらいリボーンが黒いってことだ。だってあいつ心の中真っ黒だろ。一点の白も存在しないくらい真っ黒だろ。もつひとつそ清々しいくらい真っ黒だろ。

「誰が真っ黒だって、千景？」

突然現れた新しい声に私は息を飲む。背中を冷や汗が流れる。

「わあ、久しぶりだね。リボーン。」

「久しぶりだな、千景。」

「ヒルな笑みを浮かべたリボーンが昔と変わらぬ姿でそこにいた。こいつは年をとらないのだろうか…。妖怪か何かなのかな?まあ、でかくなつたら可愛げなくなつて、余計に腹の立つ子どもになりそうだけど。

「思考がダダ漏れだぞ、千景。撃ち殺されたいのか?」

「えつ! ? 声に出てた?」

「俺は読心術が使えるんだぞ。」

だからそれ、プライバシーの侵害だから!

「ていうか、武! 何だつてこんなに連れて来るのよ!」

「ダメだつたか? ツナには言つてないぜ?」

「…つ。」

反論しようとするが言葉が出ない。確かに沢田くんに言わないで、と言つただけで他の人については何も言わなかつた。

「そこが気に入らねえ。」

「……何が？」

「何で10代田に会わねえ。」

「…会って、どうするの？」

私と彼は別れたのだ。沢田くんがイタリアへと旅立つたあの日に。私は彼を待たないと言つて、彼は私を置いて行つた。それに、沢田くんの隣には今、京子がいるじゃない。

「私は沢田くんと笑つて話せる自信がない。だから会いたくない。」

「千景…。」

「そもそもー私と沢田くんを会わせる気があるわけ？」

リボーンに向けて笑みを浮かべながら尋ねた。武、獄寺くんの視線もリボーンに集まる。

最終的には自分で下した決断だけ、私はリボーンの意向に従い、沢田くんと別れた。私と沢田くんを別れさせたリボーンが私を彼に会わせてくれるとは考え難い。

「お前は今でもツナが好きか？」

「質問したのは私なんだけど。」

「答える。」

「……好きでも嫌いでもない。ただ、もう一度と、会いたくない。」

嘘。

今でも彼が好きだ。彼に会いたくてたまらない。声を聞きたくてたまらない。

だけど、沢田くんがもし、他の誰かのものだったら？

その現実に、私はきっと耐えられない。それに、私はまだ、沢田くんを好きな自分を許せていない。だから言えない。言いたくない。

今は沢田くんに会いたくない。

「お前が会いたくないなら、会わせるつもつはねえ。」

「…何それ。じゃあ会いたいと言えば会わせてくれたわけ?  
別れると言つたくせに。近づくなと言つたくせに。」

沸々と沸き上がる怒りを私は必死に抑え込み、リボーンを睨みつける。

「千景、シナはきつと、会いたいと思つ。」

「俺もそう思つぜ。10代目は…………。」

「勝手なことばかり言わないで…！」

氣付いたら私は怒鳴つていた。武と獄寺君が驚いた顔でこちらを見ている。リボーンだけが私の心情を見透かしたように冷静にこちらを見ていた。

その冷ややかな視線が余計に私を苛立たせる。

やめて!私の心を見透かさないで!

「私を置いて行つたのは彼でしょ!私は今、沢田くんのいない今を過ごしてこるので…今更、会いたくなんてない!」

会つたら、会つてしまつたら、明日を迎えるのが怖くなる。沢田くんのいない毎日を送るのが怖くなる。

「千景…。」

「西崎…。」

「めん、やう言つて武は私の頭を撫でてくれた。獄寺くんは何か言

いたげな瞳をし、だが首を振つて頭を乱暴にかき上げた。

「千景。明日、パーティーがある。お前、出席しろ。」

「…お断りします。」

気持ちを落ちつけた私はリボーンを睨みつけた。

「お前に拒否権はねえ。それとも、穂月を一人でこちらに寄こすか？」

「…」

つまり、穂月さんを私がパーティーに行くための人質として誘つたわけ。

「人でなし。」

「褒め言葉だな。明日迎えをよこす。屋敷で待つてるぞ。」

そう言つてリボーンは困惑している2人を連れて帰つて行つた。

### 3・6パーティー

リボーンが指定した日、時間に迎えの車は来た。

乗り気でない私は穂月さんに引きずられるようにして車に乗り、パーティーの行われる洋館まで連れて行かれた。それは以前、ディーノに別れを告げた洋館に雰囲気が似ていた。

だからだろうか、ここに沢田くんがいるような気がした

私たちはメイドの様なひとたちに連れて行かれ、洋館の一室でドレスに着替えさせられた。まるでディーノと別れた日の再現のようで、私の心に不安が降り積もつて行く。

リボーンの考えていることが全くわからない。

何故、私をここに連れてきたの？ここで何があるの？

化粧や髪型を整えられている間、私は不安で揺れる心を必死に沈めていた。

考えるな。何も考えず、何も受け入れず、ただ時間まで耐えればいい。

そして穂月さんと共に、私たちはパーティー会場へと連れて行かれた。

華やかな女人たち、スーツに身を包んだ高貴な雰囲気と威厳を持つ男の人たち。そして豪華な料理。煌びやかな世界に私は気後れる。

この世界は私のいる場所とは違う。

「別世界」。というのがぴったりの言葉のような気がした。

私は入つて早々壁の花と化した。ちなみに穂月さんは珍しい料理が一杯だと嬉しそうに料理の観察に向かった。この場に気後れしない彼女に驚き半分、変な人に声をかけられないか心配半分。中身

は好奇心の塊のよつた人だけ外見は美人だし。

「心配しなくとも穂月に手を出す奴はいねえぞ。」

「…リボーン。」

私の不安の原因を作った人物の名を私は気持ち低めの声で呼んだ。パーティードというのにいつもと同じ真っ黒なスーツとボルサリーノ。しかし全く違和感がない。

「君はここに住人つてわけね。」

ため息交じりに言えば、リボーンは何も答えずにただ変わらぬ澄んだ瞳で私を見ていた。まるで心の奥底まで見透かされそうで私はリボーンから視線を外して目の前の光景を眺めていた。今所沢田くんらしき人には会っていない。

会えなくていい。このまま会えないまま、何も知らないまま帰りたい。

「こんばんは、千景。お久しぶりですね。」

懐かしい声に顔を上げると同時に田の間に飲み物を差し出された。驚きながら差し出された飲み物を受け取る。

「…骸さんもいらしてたんですか？」

「まあ、仕事ですからね。」

久しぶりにあつた骸さんは髪が伸びていたが、パイナップルな感じとか怪しい感じは変わらなかつた。

「千景、失礼なこと考えてませんか？」

「滅相モ」ヤリません。」

黒い笑顔も相変わらずのようだ……。

私は真っ黒な笑顔を浮かべる骸さんに作り笑いを浮かべて応えた。

「へえ、千景來たんだ。」

「あれ、雲雀さん。こんな群れの中でどうしたんですか？」

「なんか、口調が刺々しい気がするんだけど。咬み殺していいの？」

相変わらずの無表情、危険発言で現れた雲雀さんだけぞ、やつぱり成長しているらしく仕事だからこうして群れの中にいるのだと説明してくれた。

「千景は綺麗になつたね。啼かせてみたい。」

「えつ。嫌ですよ、泣く思いをするのは。」

「……雲雀恭弥。ちょっと殴つていいですか？」

「どうしたんですか、骸さん。ブラックスマイル発動しますよ。」

「ほつとけ、骸。千景は気付いてないぞ。」

「……相変わらず鈍いんだね、千景。」

せつかく綺麗になつたのに、とも残念そうに言われ、眉を寄せながらさつぱりわけがわからない。

雲雀さんは私の隣に立つとここ何年かで随分伸びた私の髪を弄んだ。女顔負けの綺麗な指に私の真っ黒な髪が絡む姿はどこか艶めいて見えて、少しどキッとした。

相変わらず綺麗な顔立ちにしばし見とれないと突然肩を抱くよつにして引き寄せられた。

「あまりべたべたと千景に触らないでもらいますか？」

「骸さん？」

「君にこそべたべた触らないでくれる?」

両隣で睨みあう2人に困惑しているとリボーンが何故か楽しそうに笑っていた。

「どうしたの?リボーン。」

「いや。おい、千景。悪いんだがそここの料理適当に俺に持ってきてくれねえか。」

「い、いいけど。」

悪いんだがって言い方がリボーンらしくなくて私は思わず頷いていた。

睨みあう2人を放つておき、私は目の前のテーブルに向かった。適当にお皿に料理を盛つていると誰かが私に近づいてくるのがわかった。顔を上げたらものすごい美人が私にっこりと笑いかけて話しかけてきた。

一応イタリア語は習つているけれど、だからと呟つて本場のイタリア語を聞きとれるほどの能力は私にはない。ぽかん、とした顔で見ているとその美人の顔が小馬鹿にしたように一瞬変化したのを見逃さなかつた。

彼女は私が日本人で、イタリア語がわからないであろうことをわかつたうえで話しかけて来ているのだ。そしてこうなるであろうことをわかつていて、リボーンは私にここまで料理をとらせに来た。つまり私はけんかを売られているらしい。

……知つてはいる、リボーン?私、負けず嫌いなの。

私はお皿を一旦テーブルに置くと目の前の美人にっこりと笑いかけた。姿勢を正し、真っ直ぐに女の顔を見据える。不安を表に出すな。姿だけは真っ直ぐに凛々しくあろう。怯んだら、そこで負けだ。

自分にそう言い聞かせる。彼女は私の雰囲気が変わったのを察したのか、言葉に詰まりだした。よくわからないけど、何でこんな女が…、みたいなことを呟いているのが聞きとれた。何の事だかよくわからなくて、私は心の中で首を傾げる。

『そろそろ僕たちのお姫様を返していただけますか。』

「千景。勝手につりつかないでよ。」

目の前に骸さんが私を庇つよう現れイタリア語で目の前の女性に何かを言い、後ろから現れた雲雀さんに抱き寄せられた。男の人に抱き寄せられたのなんか久しぶりすぎて、私の頬は自然と熱を持つ。「じやくさにまぎれて千景にセクハラするのはやめてください。怒られますよ。」

「よくわかつてゐるじやないか、骸。」

誰に？そう問おうとしたら声が聞こえた。

その声に私の心臓は大きく一つ鼓動を刻み、私は雲雀さんの腕の中で身を強張らせた。

「いい加減、放れでもれますか？雲雀さん。」

「もう仕事終わつたのかい？」

「何残念そうにしてるんですか。」

「はいはい。」

雲雀さんがとても名残惜しそうに私から放れ、開けた視界の向こうにいたのは、薄色の髪を持つ、会いたくて、会いたくて…、でも、会いたくなかった人だった。

「久しぶり、西崎さん。」

「沢田くん……。」

といひ、余ってしまった……。

### 3-7 懐かしい温度（前書き）

更新遅くなりました。

### 3・7 懐かしい温度

「もう仕事を終えたんですか？」

「そうだつてわざわざも言つただろ。」

呆れたように言つ沢田くんに骸さんはいつもそれなら助かるんですけどね、とため息交じりに呟いた。その呟きに沢田くんは拗ねた顔になる。幼さの残るその表情は私の知る沢田くんで、ひどく胸が苦しくなつた。

「千景？」

「西崎さん？」

2人に驚いた顔で見られ、戸惑つ。

私は何かしたんだろうか？

「泣いてる。」

隣に立つていた雲雀さんが私の手、じりを拭う。そこで初めて私は自分が泣いていたことを知つた。

どうして、私は泣いているんだろう。

何も悲しくなんてないのに。すぐ愛おしくて、でも切なくて…。それはきっと、もう届かないと分かっているからかもしれない。だから昔と変わらぬ顔を見ると、愛しくて、切なくて、胸が締め付けられるんだ。

「ツツ君？」

びくり、と肩が揺れた。現れたのは、先日見た女性と同じ姿をした

京子だった。あの日、沢田くんに寄り添っていたのはやっぱり京子だった。

「もしかして、ちかちやん？」

驚いて私を見る京子に私は精一杯微笑んで見せる。沢田くんの隣に立つあなたはなんて綺麗なんだろう。なんて、凛としているんだろう。

「どうして…、どうして、そこに立つのは私じゃないんだろう。どうにも抗いがたい感情に私は一步後ずかる。つらい。

ここにいるのが、とても苦しい。

みんな昔の様に私を受け入れてくれるのに、私の知らない時間があって、確かに何かが変わっていて、沢田くんが遠くて…。

「『』めんなさい、少し、外の空気が吸いたい。」

「千景？」

私はみんなに背を向け、会場を抜けた。当てもなく歩き、庭の様な場所に出た。やっと、息が出来るような気がした。月明かりに照らされて闇夜に浮かぶ花々は美しくて、孤独で、悲しかった。それを見ていたら、自然と涙が溢れてきた。大粒の涙が頬を伝い、地面上に落ちる。

私の胸を占めるのはどうして、ここにこれまで何度もしてきたかわからぬ問いかけだった。

どうして、私は沢田くんの隣に立てないの？どうして、好きなのにこんなに苦しいの？どうして、京子なの？どうして、どうして……。

問いかけてもしようがないのに、隣に立てないことも、苦しいのも、隣に立つのが京子であることも受け止めるべき現実で、隣に立てな

いのは私が無知なせいであることも、好きだからこそ苦しいことも、支えてきたのが京子だつてこともちゃんとわかってるのに、私は飽くべになく同じ質問を心で繰り返す。

「どうして…、私じゃダメなの…？」

「西崎さん？」

思わず振り返ると、驚いた顔をした沢田くんが立つていて。すぐにつくに返り、自分の顔が涙でぐしゃぐしゃであることを思い出す。咄嗟に踵を返し、走り出そうとしたが沢田くんに腕を掴まれてしまつた。

「何で、泣いてるの？」

「泣いて、ない。」

「泣いてるよ。今日は月が明るいから、よくわかる。」

お願いだから、そんな風に優しくしないで。そんな風に私に触れないで…。

「何で、泣いてるの？」

「やめてよ…。」

「西崎さん？」

「やめてよ…。」

私は思い切り腕を引き、沢田くんの腕を振り払つた。

「私が泣いていよつが沢田くんには関係ないーーお願いだから、これ以上踏み込んでこないでよーー！」

溢れる涙をそのままに私は沢田くんを睨みつけた。ひどく傷ついた

瞳が私を見つめる。

「どうしてそんな瞳をするの？」

やめてよ…。これ以上、かき乱れないで。これ以上、私に惨めな思いをさせないで…。

「先に、踏み込んできたのはやつしだよ。」

一步踏み出し、その一步で私と沢田くんの距離は縮まつた。身を退く隙を『ええず、私は沢田くんの腕の中に入った。

「俺をかき乱すのは、君だよ…。」

あまりにも切なく漏れる言葉で、私は金縛りにあつたよつと動けなくなってしまった。

「な、んで…？」

何で、そんな声で言つの？何で、抱きしめるの？

緩く囲われた腕の中で身じろげば、逃げると思つたのか、先ほどよりも強く抱きしめられた。雲雀さんに抱き寄せられた時以上に胸が騒ぐ。ドキドキする。

「やつとの思いで手放したのに、突然現れるし。かと思えば、雲雀さんに抱きしめられてるし、田は合わせてくれないし、泣くし、逃げるし。」

言葉は責めているのに、どこか拗ねているようなその口調に私の頭は戸惑つばかりだ。

「えつと、『めん、なさい…？』

「謝るなら、俺の顔を見て欲しいんだだけだ。」

見上げれば、先ほどの口調とは裏腹に不安で揺れている沢田くんの瞳があった。

「余裕があるよ！」見える？」

素直に首を振れば、沢田くんは苦笑する。昔と変わらぬその笑い方にまた、私の瞳から一筋涙が零れる。そんな私に穏やかな笑みを浮かべた沢田くんは再び私を抱きしめた。やつせよつもずっと強く。放さない、というように。

「『めん。ダメだつてわかっているんだ。でも、どうか今だけは…。』

「

もう少し、このまま。弱々しい声で紡がれた言葉に抗う術を私は持たず、緩々とその背に腕を回した。そしたら抱きしめる力がまた少し強くなつた。

懐かしい君の腕の中は、ドキドキして、でもやつぱり、安心できる場所だつた。

なのに、どうしてなのかな…。涙が止まらないの…。

### 3 - 8 断ち切る決意

今日は遅いからということで私は沢田くんに部屋に案内された。しばらくしたらお酒を飲んで上機嫌の穂円さんが武に連れられてやつてきた。2人で何やらしゃべっている穂円さんをベッドに寝かせ、今、この部屋で起きているのは私だけだ。

窓際に椅子を運び、その上で膝を立て座りながら空を見上げながら思うのは去り際の沢田くん。

全然私の方を見ようとはしてくれなくて、最後に見せたのは作り物の笑顔だった。まるで距離を置かれたようで、すごく悲しかった。膝に上に置かれた手首を視界に入れ、私はもう片方の手でその腕を撫でた。まだ沢田くんの温もりが残っているような気がして唇を寄せれば、涙が一粒零れ落ちた。

「今日は涙腺が弱いみたい。情けないな。…ね、リボーン。」

呼びかけると、真っ暗なはずの闇の中でもそれが動いた。

「よくわかつたな。」

月明かりの下に現れたのはパーティーの時と同じ格好をしたリボンだった。

「なんとなく、来るような気がしていったから。」

— そ  
う  
か

「作り笑いを、向けられたの。」

まるで、これで終わりだと呟つよつ。もう、会わないと言つよう

「千景、お前は……。ツナが好きか？」

すく優しい声での問いかけだった。だからなのか、涙がぽろぽろと溢れてきた。言つてもいいのだと、言われているようで。

「す、あ……。沢田くんが好き……。」

好き、好き、好き……。

まるで壊れてしまつたかのように私は何度もその言葉を繰り返した。だつて、何度言つても足りないくらいに好き。好きなの……。だからお願ひ……、せよならなんて言わないで。私を、置いて行かないで……。

「やつと素直に言つたな。」

苦笑まじりの言葉に私は涙を必死で拭いながらしゃくりあげる。もう20歳も過ぎた大人がみつともなく泣いているのに、リボーンは相変わらず優しい声で私はまるで幼い子供のように泣き続けた。

次に目が覚めたら、窓の外にあるのは空高くに上つた太陽だった。ぼんやりとした頭で部屋の時計を探す。立派なテーブルの上に置かれた立派な置時計の差す時間は11時32分。立派に寝坊していた。

「うわ~……。」

ため息交じりに立ちあがるとひとり、と床に何かが落ちた。ブランケットだった。たぶん泣き疲れて眠つてしまつた私にリボーンがかけてくれたのだろう。

昨日のリボーンは随分優しかったな、なんて考えながら私はそれを綺麗に畳んでテーブルに置いた。

穂月さんの様子を覗きに行くと、彼女は幸せそうな顔でまだ眠っていた。あんまり幸せそうだから起こすのが忍びなくて、そつと寝室を後にする。

部屋をよく見れば昨日来ていた洋服が置いてあった。それに着替え、私は再び窓際の椅子に腰かけた。

そして、沢田くんと京子を見つけた。

動搖はなかつた。彼は京子を選んだ。その事実だけが心に刻み込まれた。

選んでくれないなら、傍に居させてくれないなら、なにより…、私が君を惑わせるなら…。

私は立ち上がるといつも寝かせてやろうとした穂月さんを無理矢理起こした。

「何よ、千景。もう少し寝かせてくれてもいいじゃない。」

「もう正午ですよ。いつまで寝るんですか。」

「…ねえ、何で泣きそうな顔してるの?」

「帰ろう、穂月さん。」

穂月さんの問いかけには答えずに言った。自分が泣きそうな顔をしていることくらいわかつてた。だつて、泣くのをずっと我慢しているのだから。これ以上、そんな未練たらしい顔を見られたくなくて、私は俯いた。

「…帰ろう。」

小さく呟いた言葉に、穂月さんは何も言わず立ち上がって私を抱きしめた。

「それが、あなたの選択…？」

穂円さんの腕の中で私は「く、と頷いた。  
これ以上、あなたが私のせいであんな悲しそうな顔をするなら…、  
私はここから出て行く。もう一度とあなたに会おうとはしない。ち  
ゃんと、諦めるから…。

「帰る、穂円さん。…帰る。」

帰る、帰る、とそう縋る私を強く抱きしめ、穂円さんは何度も  
頷いた。わかつたから、もういいよ、とこいつは、彼女の綺麗な  
手が私の頭を撫でた。

### 3・9 秘めた想い

「本当にいいのか？ツナに会わなくて。」

「いいの。ていうか、武。その質問何回目？」

運転席の幼なじみに私は深いため息を吐きながら言った。だつてよ、と未だ納得しない武に私は再びため息を吐く。

あの後、つまりは穂月さんに子どものように何度も帰りう、と言つた後、私は武に頼んでこうしてホテルまで送つてもらつている。当初渋つていた彼だつたが、穂月さんからもお願ひされると了承してくれた。

「いつ帰国するんだ？」

「…教えない。」

ホテルに着くやいなや聞いてくる武に私は眉間に皺を寄せて言った。予想外の答えだつたらしく彼は虚をつかれたような顔をして、すぐには納得できないと口をへの字に曲げた。

「何でだよ。」

「だつて、帰国の日にみんなのこと連れてきやうなんだもの、あんた。拳句の果てには沢田くんも連れてきそつ。」

団星だったのか、あはは、とわざとらしい笑い方をする武に私思わず苦笑する。

「仕事忙しいんでしょ？頑張つて働きなさい。」

「なんか、母ちゃんみてえだな。」

「「ひんなマイペースな息子はこりません。」

さつぱり言じ放ち、どちらからともなく笑いだした。そういえば、あの日空港まで連れて行ってくれたのは武で、今回こいつして沢田へんと会ひかけをくれたのも武だつたな。

「千景？」

背伸びをして、武の首に腕を回し、抱きしめた。武が驚いているのがわかる。いつも笑顔で余裕のある態度しか見せないだけにそれがなんだかおかしくて、私の顔は自然と笑みを浮かべる。

「あいがとう。… わよひなひ。」

ぱっと、武から放れ、ホテルの入り口で待つていてる穂円さんの所まで振り返りざすに走った。

「ぱいぱい、武。」

「……。」

振り返り、そう言えば、武はどこか泣きそうな顔をしていた。

そんな顔、しないで？私は大丈夫だから。

心配性の幼なじみにそう伝われば良いと思いつながら私は微笑んだ。

「千景。帰国が明日だつて、武くんに言わなくて本当になんかかったの？」

「良いのー。だつて、あいつ本当にみんなを連れてきかねないもの。」

「だつて、もう会えないかもしれないんでしょ？」

「うん。… でも、だからこそ、楽しい思い出だけ覚えていたいから。」

「

別れの記憶なんて、一度だけで十分だ。

「何でも自分で解決させちゃうのは、あなたの悪い癖ね。」「え？」

「千景。想いつていうのはね、言わなければ伝わらないよ？」

わかつているよ。痛いほど、わかつていて。

でも、じゃあ、本心を言つたら何かが変わるとこいつのだらうか。この苦しい気持ちから無くなるとこいつのだらうか。

「伝えないことを、私は選んだんだよ。」

笑つてそう言つたら、穂円さんはひどく悲しそうな顔をした。でもね、私には無理だよ。だって、これ以上、彼の悲しい顔を見たくない。

これ以上、悲しい思いをしたくないもの。

### 3・10拉致（前書き）

今回少しまぎれです。  
読みづらい文章かもしれませんがあしからずください。

武に送つてもらつた翌日、私は穂月さんと共に日本に戻つて來た。もう一度と沢田くんに会つことはない。会つてはいけない。だからこそ私は今度こそ前を向いて生きていかなければいけない。

その第一歩として、私は今、並盛に來ている。沢田くんとの思い出に溢れるこの町を嫌いになりたくはなかつたから。嬉しいことも悲しいことも、全部すりやんと受け止めたい。

そんな心機一転の思いで歩いている並盛だけど、今日はやけに黒いスースの人が多い。昔、沢田くんの仕事相手だと穂月さんのお店に来ていた人達と同じく雰囲気が似ている。関わり合いになりたくない、私は彼等を避けるようにして歩いていた。

「～～～？」

角を曲がりとしたところで声が聞こえ、立ち止まつた。つい先日まで聞いていた言語だつた。

つまり、イタリア語。

「～～～チカゲ、ニシザキ～～～。」

会話の中で聞きとれた自分の名前に驚きに目を見張る。全く面識もないさうな彼等が何故自分の名前を知つているのか。わかるのは、この人たちが何かの目的で私を探しているのだということ。彼等が何を言つているのか全くわからず、それでも必死に耳を傾けていると、男たちは不意に懷に手を差し入れ、それを取り出した。

鈍く光る無機質なそれに私は息を飲む。

日本では取り扱いが禁止されているもの、……銃だ。何でそんな物

騒なものを持つてはいるのか皆田見当もつかないけれど、あまりいいことじやないつていうのはわかる。

彼等は私が並盛にいることを知っていた。それはつまり、彼等は私の情報を持つてはいるということだ。だからきっと実家は見張られているだろう。おそらく私に馴染みのある場所も全部。どこに逃げればいいのか、身を隠せばいいのかわからず、私はそこから動けずにはいた。まるで猫に追い詰められたねずみのようだ。ない頭で必死に考えていると、突然、後頭部に固くて冷たい何かが押しつけられた。

呼吸が一瞬止まる。

「見つけた。お前がチカゲ・ニシザキだな。」

愉悦に満ちた流暢な日本語を聞いたのとほぼ同時に私の意識は沈んだ。

次に目が覚めた時、私は両手両足を縛られた状態で転がされた。よく見れば、そこは見覚えのある場所だった。

「…黒曜、ランド……。」

人目の少ないここは人攫いにはもつてこいの場所かもしれない。それにしたつて、自分が拉致された理由がわからない。でもここに長居するのは得策じやない。そう思つて、なんとか縄が解けないかやつてみるが上手くいかない。

乙女のやわ肌をこんなに締め付けないで欲しい。跡になつたらどうしてくれるんだ。そんなずれたことを考えていたら、私のいる部屋のドアが鈍い音を立てて開けられた。

「おや、お田覚めになられましたか？」

やけに芝居がかつた口調に視線を向ければ、にこにこと笑っている男。日本人にはないスラリ、とした長身。グレーがかつた瞳。

「あなた、誰？ 何で、私を攫つたの？」

「ああ、君は何の事情も知らないんでしたね。ボンゴレのお姫様。」

訳のわからないことを言つ男に私は自然と眉を寄せる。でも最後の一言だけは聞き逃せない。男は言つた。

「ボンゴレ」と。

それは私の知らない沢田くんの秘密に関係する言葉。

「おや、ボンゴレという言葉には聞き覚えがあるのかな？ 君はボンゴレ10代目の最も大切な人らしいからね。利用させてもらおうと思いまして。」

「ボンゴレ… 10代目…？」

男は口元を歪ませ、私に告げた。

「沢田綱吉だよ。君には沢田綱吉をおびき出す餌になつてもらいます。」

沢田、くん…？

「大変でしたよ、君を見つけるのは。ボンゴレはとても上手に君を隠していましたから。」

隠す？ 私を？ 訳がわからない。

頭がついて行かず、混乱する私をよそに、男は愉悦からかますます

口元を歪め、笑みを浮かべる。

「「」れでよひやく、ボンゴレー〇代田の屍が見られる。」

クツクツと笑い声を上げる男の声に私の背中を冷や汗が流れる。いや、それより、この男は今何で言った？

「あんた、沢田くんを殺すつもりなの…？」

私の問いかけに笑い声を消し、何も言わずその恐ろしい笑みを私に向けた。それが答えた。こいつは、私を餌にして沢田くんを殺すつもりなのだ。やつと、そう頭で理解する。

「……ダメ……。」

「ん？」

そんなの、ダメだよ。ダメ。そんなの、ダメ。沢田くんが死ぬなんて絶対に嫌だ。あの人は、悲しいまでに優しいあの人は……、誰よりも幸せにならなくちゃいけないのに……！

「おや、気に入らない眼をしますね。」

男は私の顎を掴み、顔を覗きこんでくる。私は口を反らはず、男を睨んだ。

「気に入らない。お前の眼を見て「」とボンゴレを思い出す。……ああ～、気に入らないな。」

その瞬間、男の瞳に狂気の色が宿るのを見た。首を掴まれ、上半身を起された状態で壁に押し付けられる。喉を圧迫され、咳が

出た。

「ケホつ…。」

「非力な分際で俺にそんな眼向けるなよ。」

額に銃を押し付けられる。それでも私は男を睨むのをやめなかつた。そうだ。そのまま逆上して、私を殺せばいい。私が死ねば、沢田くんを縛るものはない。

殺させない。絶対に、殺させたりしない。

「お前なんかに沢田くんが殺されるはずがない。」

そう言つたとほぼ同時に頬に鈍い痛みが走つた。その衝撃に私は床に叩きつけられる。よくわかんないけど、たぶん、銃で殴られたんだと思ひ。口の中が切れたみたいで、鉄の味がする。

「……つ。」

なんとか痛みで上がる声を噛み殺す。それが気に入らなかつたらしい男はさらに私に暴行を加えようと腕を振り上げた。

「それ以上彼女を傷つけてみる。灰も残さずに殺すぞ。」

突然聞こえてきた声に男の腕がぴたり、と止まる。

「やつと来ましたか。ボンゴレー0代目。」

ぼんやりとした視界の先には、オレンジがあった。とても優しい色をしたオレンジ。オレンジの炎を燈し、立っていたのは間違いないく沢田くんだつた。少し遠くて、ぼやけた視界では彼の表情まではわ

からなかつた。

「え、わ・・・だ、く・・・ん？」

なんとなくだけど、沢田くんが笑つてくれた気がした。大丈夫だつて、言われている気がした。安心していい状況じゃないのに、私は何故か安堵していた。

「彼女を巻き込んだ」と、後悔させてやる。」

「随分と余裕ですね。こちらには人質がいるんですよ。」

沢田くんの放つ何かに押されてか、先ほどまで余裕を見せていた男が焦りを見せる。

「残念ながら、彼女は返してもらいますよ。」「え？」

いつの間にか、私は誰かの腕の中にいた。

「お前は霧の守護者ー。」

「ご明答。ボンゴレに気を取られて気付かなかつたようですね。」

「む・・・くろ、さん?」

「はい。もう大丈夫ですよ、千景。まあ、あの男は大丈夫ではないと 思いますがね。」

最初の方の優しい声から一変。男に向けた骸さんの言葉は私が思わず身を縮めてしまつほどに冷たかつた。

「ボンゴレの姫に手を出したんです。沢田綱吉の怒りは測り知れませんよ。もちろん、我々守護者の怒りも買つたんです。このマフィ

アも今日限りですね。」

「骸。無駄口はいいから、彼女をここから連れ出せ。」

「はいはい。普段温厚な人ほど怒ると怖いですね~。」

そんな軽口を叩きながら、私の四肢を縛っていた縄を切り落とすと  
彼は私を抱き上げた。

「さわつ…！」

「後で会えるよ。だから、待つてて。」

その言葉が嬉しくて、私は泣きそうになりながら笑った。そして、  
骸さんに連れ出された。

### 3・1・1 言えない言葉

頬に少しひんやりとしたものを感じ、私は意識を浮上させ、瞳を開ける。寝ぼけ眼の視界に映つたのは愛しい薄色だった。

「さ、わ・・・だくん?」

「うん。」

優しく髪を梳かれ、心地よさに眼を細めた。次第にはつきりとする視界に沢田くんの優しげな笑みを捉える。

沢田くんだ。また、会えた。

そう思つたら涙が一筋頬を伝つて零れた。その涙を見て、沢田くんは眼を瞠る。

「どうしたの? 頬痛む?」

慌てた様子の彼に首を振るとゆつくりと体を起こした。見渡した部屋は見覚えのない場所で私は首を傾げる。

「ここは、地下施設なんだ。安全な場所だから大丈夫だよ。」

地下施設? 何だってそんな所にいるのだろう。よくわからないけど、沢田くんがボンゴレとかいう組織の10代目だということと関係があるのだろうと無理矢理自分を納得させる。

「頬、冷やしていたけどまだ少し赤く腫れているね。」

「でも、もうほとんど痛くないから。」

笑つてそう言えば、沢田くんは眉間に皺を寄せ、悲しそうな顔をし

た。

「沢田くん？」

「何で、何も聞かないの？ 何で、何も言わないんだよ。」

「……。」

聞けないし、言えない。だつてそれは、ずっと自分に禁じてきたことなのだから。

「私は、沢田くんが無事ならそれでいいよ。」

「いいわけないだろ！？！」

初めて聞く沢田くんの厳しい声に私はびくり、と肩を揺らした。驚き顔を上げれば、拳を振るわせ、とても苦しそうな顔で私を見る沢田くんと眼が合つた。

「俺のことより自分のことを考えろよー殺されかけたんだぞ！」

そう。たぶん、沢田くんが後一歩でも助けに来るのが遅かつたら私は、死んでいたろう。あの男の瞳に宿る狂氣は本物だつた。それでも、沢田くんが生きててくれればいいと思ったから。

私はあの時、死を望んだんだ……。

今更ながらにそれは、とても怖いことだと思った。私の死体を見て、沢田くんは何を思うのだろう。きっと、自分を責め続ける。自分のせいだと。それじゃあ意味がないのに。

「俺はあの時、全身の血が引いた。怒りだけが沸いて来て、目の前の男を殺すことしか考えられなかつた。」

怒りと悲しみが入り混じったような顔をして沢田くんが声を絞り出すように言った。沢田くんにこんな顔をさせて、私は何をやっているんだろう。違うのに。笑って欲しいのに。どうして、上手くいかないんだろう。

「…………じめんなさい。」

謝罪くらいこしか出来ることが思いつかなくて、私は俯いてぽつりと呟いた。

「何で、謝るの。巻き込んだのは、俺だろ。」

「違う、違うよ。やうじやななくて、やつこつじやななくて……」

「！」

上手く言葉に出来なくて、でもちゃんと伝えたくて、私は無意識に沢田くんに手を伸ばしていた。でも、その手は沢田くんに弾かれた。今まで、一度だって避けられたことがなくて、私はただ茫然と沢田くんを見ていた。

「何も聞きたくない。君が言つのは俺を気遣つた言葉だから。」

「そんなこと……。」

「本心はこつも言つてくれないよね。……怖かつたつてこつぱたり前のことす、俺には言つてくれないんだね。」

悲しそう揺れる瞳に胸が抉られるような気がした。そしてそのまま沢田くんは私に背を向ける。

「…………つー。」

言いかけた言葉を噛みしめる」とで飲みこんだ。彼のいなくなつ

た病室に残つたのは静寂と空を掴んだ所在のない私の手だけだった。弾かれた手を胸元に戻し、もう片方の手で包み込む。涙が頬を伝い、胸元で握った拳に落ちた。

行かないで。

そのたつた一言さえ私は君に伝えることができなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1656w/>

---

君と私の恋愛模様

2011年11月23日21時56分発行